保存用
永久保存

サンカク

3・1－3

都立松原高校図書館

6

No. S－59
東京都立松原高等学校図書館

東京都立松原高等学校

白い野花

二年E組　竹村順子

名も知られずに
黙っている、白い野花。
誰も気付かずに、
通りすぎていく……。

華美のみを追う者には、
田舎臭くうつる
飾らない素朴さ。
それが私には、
たまらない魅力。

気まぐれ者に
摘みとられ、
温室咲に比べられ、
〃シユン〃と小さくなる。

青空と輝く太陽を
仰いで育ったのさ、
いつかは、誰かが認めてくれる、
小さな白い野花よ、
精一杯おのび!!

目次

とびら　白い野花……二　E　竹村　順子…一
る・くーるを顧みて……学校長　中村　一勇…五
クラブ紹介……各クラブ…六

詩

挿話……二　A　吉川　幸男…一一
蛾……一　F　木村　保子…一二
夜明け……一　B　宮崎　和子…一二
おばあちゃん……二　E　島崎　麻子…一三
秋色……一　F　酒井　惇子…一四
恋……二　A　白石　雅紀…一四
哀……二　D　諫早磨美子…一五
ふゆのよのゆにて……二　D　荒川　弘悦…一六
さまよい歩こう……二　C　杉戸　克彦…一七

隨想

弟……一　C　花田　潤子…一九
負けられません千恵子には……一　E　渡辺　静枝…二〇
秋に思う……二　A　白石　雅紀…二二
郷愁……二　C　佳川　節子…二三

三年生へ……一　E　増井　円子…二四
人間……一　C　諏訪　修一…二五
我々の進むべき道……一　D　村　光二…二七

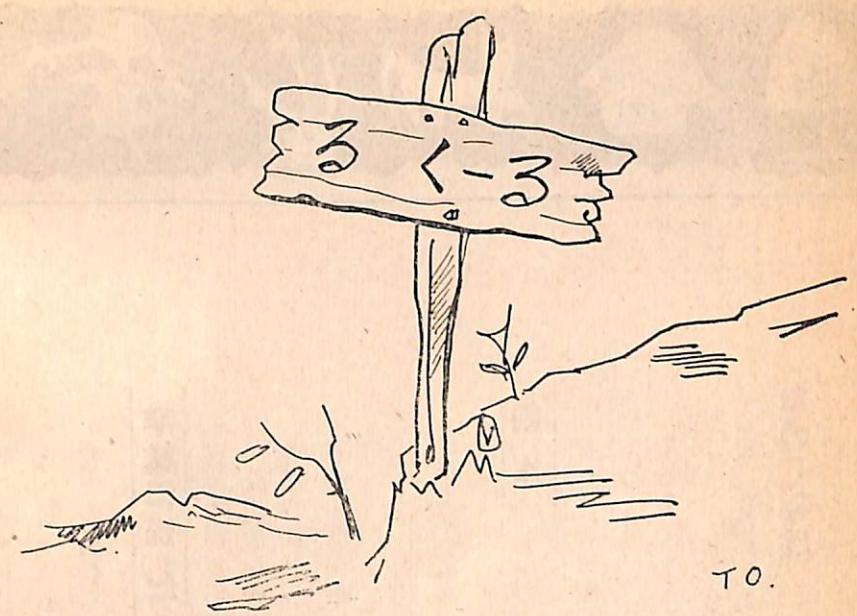
卒業に際して

在学中の思い出……三　B　鈴木　澄子…三四
高校生活を顧みて……三　A　池田　洋子…三五
明日の風……三　E　木村　勇…三六
高校生活を振り返つて……三　C　沢村　興平…三七
別稿　マリヤ・ルース号事件……教諭　坂本　夏男…四〇
特寄　新高山登山記……教諭　永浜　先義…四三

創作

夏休みの日記帳から……二　C　高津　龍二…四八
鳥さし……二　E　島崎　麻子…五一
或る事……二　A　吉川　幸男…五二
ひとりしづかの花咲けり……三　E　木村　拓郎…五五
因果……二　B　渡部　斉…六二

たのしみは……七二
編集後記……七四



LE CŒ UR について

LE COEURという名が存続することになつたので、ここに改めてその語義を明らかにしておきましよう。

LE CŒ URは英語のThe Heartに相当します。LEはフランス語の単数男性名詞につく定冠詞です。coenrが男性だとはおかしなものですが、しかしこれは理屈ではありません。

coeurはheartと同じく直接には心臓そのものを指すのですが、心臓は身体の中央にあり、深奥にあり人間の情感のよつて起る本拠とされています。さらには又、脳髄の所管を犯して人間の心とか魂とかの所在とも考えられているのです。崇高な叡智も感情も、勇気も健かに脈動するLe coeurからこそほとばしり出るのではないでしょうか。

る・くーるを顧みて

学校長　中村一勇

純文芸誌として発足した本誌も年を重ねること六回、今や名実共に生徒に親しまれるところまで成長したことは、誠によろこびにたえないところである。創作、随筆、紀行、小説、和歌、俳句等生徒の作品で飾られたことも、本誌のなりたちから当然なことであった。生徒の感情面である情操は、文章と歌によって遺憾なく表現されたにちがいない。しかし時代は相当に進んでいるのではあるまいか。

映画は一般に娯楽と考えられているが、現代の映画は娯楽ばかりでなく、広く科学映画あり、実写あり、教育的のものあり で、映画の占める使命が多角的になってきて、学校に於ても、視聴覚教育の名まで生れて、映画が非常な重要な役割を果すに至ったのである。従って映画の意味は、極めて広汎で単に娯楽と考えられたのは、古い昔のこととなってしまった。

文芸についても純粋のものも勿論意義深いのであるが、学校といういろいろの個性の生徒の集りの場においては、もっと幅を拡げてもよいのではなかろうか、単に文芸的な作品ばかりでなく、論説あり、研究あり、人生観あり、生徒の作品あり、教師の作品ありで多種多彩の内容となる時、夢の多い高等学校らしい味が生れてくるのではあるまいか、る・くーるといっても、このように内容を拡げても少しも差支えないばかりでなく、好ましい学校誌といえよう。学校から出すものは、寧ろ純粋のものよりも、生徒職員の多くの内容を多分に盛ることが発刺とした高校生らしい親しみあるものとなろう。

ルクールの真の成長は、純文芸から脱皮して広い視野に立って、書く人にも内容にも制限をつけるべきでなく、全生徒職員のもたらしめるところにあると思う。私はかかる意味で今後大衆性をもたしめることが、本誌の飛躍的発展となることを信ずるのである。しかし内容はどこまでも自己を掘下げた土台に立って深い思索と反省とをめぐらし、工夫創造の才によって、個性豊かな作品で満たされることを心から祈ってやまない、かくすれば本誌の意義と使命とは倍加し、年間二回も三回も発刊するに至るであろう。

（三三・二・二一）

クラブ紹介

規約に「本会は個人の趣味を深め、特別な能力を一層伸展させ、教養を高めることを目的として……」とある。クラブとは、全くその通りのものである。そこで、ここにクラブ紹介をする。これだけでは、とても十分ではない。実際にそのクラブの門をたたいて見ることが必要なのである。自己をよく考え、又、隣人をよく考えて、クラブ発展に尽すように努力してもらいたい。それは、生徒会活動が活発になる大きな一因となるものであるから。一、はクラブ内容。二、は経過。三、は今年の抱負。としてある。新一年の活躍を大いに期待する。

（アイウエオ順）

運動部

剣道部

一、部員は女子四名を含めて二十名位。道具一切を備えている。週に三度の稽古。暑中稽古、寒稽古、鏡開き、等。現在有段者五名。

二、十一月に名門駒場高校と対校試合を行い一対一の成績。

三、他校との対校試合をどしどしやる事。夏の東京大会にも出場したい。

柔道部

一、部員は三十名。練習日は火、水、金曜。一年生は、基本（受身、形）を主体に練習。

二、対校試合七回。城西地区大会五位。暑中稽古、寒稽古、鏡開き、夏休み合宿。

三、二、三年生全員を有段者にする。

卓球部

一、例年通り四月の始め頃は部員が百八十名になったので練習日を男女別に分け、不足な所はロードワークや空振り等をやって補った。練習を厳しく行ったせいか部員は六十名程度に減った。

二、対校試合では駒馬に五対二で負けたのが唯一の負けであり、千歳や市ケ谷高校等には圧勝している。又十一月二十七日より四日間校内卓球大会を行った。

三、今後、新一年生に期待してまとまりのある練習をやっていこうと、一同意気込んでいます。

庭球部

一、部員は百余名。コートは二面で一面は現在使用不能。セルフテニスを備え、又、ラケットも多数用意してある。

二、六月に校内庭球大会、七月に球技大会。対校試合としては、四校大会等。勝率は五割を上回る。

三、コートは近く工事の予定。計画的練習を行いたい。初心者も歓

迎。

排球部（男子）

一、新二年、十二、三名と新三年二名、一週三日を原則として練習している。

二、夏休みには、一週間程合宿を行った。一年生の試合慣れ程度で試合数は、少なかった。

三、個人プレイをチームプレイとし、一そう活発にしたい。又、新一年の多数入部でそれを助けていただきたい。

排球部（女子）

一、現在の部員数は一、二年合せて十六人です。練習日は火、木、土曜ですが、冬期は体育館で基本練習を行っています。

二、昨年は部員の希望で夏期合宿を行いました。成績は春のリーグ戦、四勝三敗、憲法大会は二回戦で敗れました。秋の新人戦は二勝しかあげる事ができませんでした。

三、今年度の希望としては人数が少いのでもう少しふやしたいと思っています。

舞踊部

一、部員は現在十五、六人。練習は水、土曜。指導は舞踊家、内田裕子先生でモダンダンスを主に練習。

二、二月の芸能祭には舞踊詩・四季を上演。

三、今年度からは昨年の努力を踏台としてもっと感銘深い舞踊を創作したい。

野球部

一、部員十五名

二、昨年度の対校成績八勝四敗

三、今年も、大会での優勝を目指すのみ。バックネットも出来る予定だし昨年度以上の成績をあげるであろうことを信ずる。

ラグビー部

一、橋本監督指導のもとに、毎日、苦しい練習の中に只一つ、目的完成の喜び、快感を求めている。それは人間完成の第一歩となると信ずる。

二、昭和三十一年度が全盛期であった。が、その後は、今一歩！と悲涙を呑んできた。

三、二年前のラグビー部に復興したい。（その年、関東大会には、東京代表として、水戸まで遠征した。）新一年生の入部を大いに期待する、そして、誰にでも愛される部になりたいと思う。

籠球部（男子）

一、男子三十人程のファイトあるクラブである。上級生はいないが、日大の方にコーチをお願いし、皆、はりきっている。

二、三十一年度の世田谷における〝強チーム〟の名も、昨年六月、二年の退部によって消えてしまった。昨年は、全敗の憂き目を見たのである。

三、只「今年こそは!!」の一言である。生徒諸君の御支援をお願いする。

籠球部（女子）

一、在籍数は多いが練習に出る人が少く、又上級生になるにつれて辞めて行く傾向が見られますが、体育館も出来て、大いに練習に励んでいます。
二、今迄の憲法大会、対校試合等の戦率は二割五分程ですが、歴史も経験も浅いクラブとしては、前途有望だと思います。とかく起りやすい女子間のトラブルもなく自力で今日迄築いてこられた事は喜ぶべき事と思います。
三、今後も部全体を協力と努力でおし進めていきたいと思っています。

文化部

英語部

一、二十名の部員が毎週水曜、外人教師の生（なま）の英語を two heads are better than one.（三人寄れば文殊の智恵）をフルに活用して聞き、実用英語、教養英語を習得している。
二、昭和三十二年六月五日、語学部を英語部と改名した。
三、更に充実させ、レコードによる発音、会話練習、及び外人との懇談会、アメリカン・スクール見学等を行いたい。

演劇部

一、上演を目的とした劇の練習。他に講師を招いて、発声法、パントマイム等の基本練習。
二、四月に「雪晴れ」（若草物語より）、九月に放送劇「金色の花」を上演。芸能祭には「夕鶴」（木下順二）を上演。いづれも好評。
三、新一年生の入部を期待して、大いに活躍したい。

音楽部

一、楽器も少く、指導者や伴奏者がおらず、又人数（特に男子）が少いために不活発な現状。
二、芸能祭には、混声合唱、男声四重唱、独唱、女声二重唱、バイオリン独奏を発表。
三、多数入部していただき、もっと活発な音楽部にしてもらうことを期待する。

化学部

一、部員は二十名前後。
二、実験と三年生による基礎実験についての講義を平行。実験後にレポートを書いた。井戸水の含有物の定量、各教室の空気中の炭酸ガスの定量を行った。化学部研究会にも六、七回出席。
三、

家庭部

一、人形作りや料理等の実習を行っています。料理の実習は一人一

回五十円位で行っています。
二、昨年一年間は二階増築のため計画した事ができませんでした。現在部員は二十名位おります。
三、部員が少いので多くの部員が入って下さる事を望み、広く活動したいと思っております。

華道部

毎週水曜日に集まり、のびのびと自由に練習にはげんでいます。人数は三十人ぐらいですが、生け花は女性にとって大切なことですので、もっと多くの方に入ってほしいと思います。流儀は京都小流で、先生に来てもらっていますが、基礎がしっかりしていませんので、基本的なことを中心にしてやっています。今後多くの方に入部していただき、有意義なよりよいクラブにして行きたいと思っています。

写真部

一、部員三十七名。生物室に暗室を設け、毎週暗室操作をやっている。
二、年に二回、部員による写真展を盛大に開催。
三、引伸技術の向上。

珠算部

一、部員は四十六名。
二、全国の珠算競技大会に一回出場。
三、読上算、読上暗算に力を入れる事。競技大会にどしどし参加、又誰でも三級程度に合格する様にする事。

書道部

一、専ら楽しんで書くことを建前として、練習を続けています。毎週十四番教室で火曜、木曜に各自、好むままに、顧問の森先生の手本や、図書室の本を利用して下校時迄を自由に過ごします。
二、近所のお寺に拓本取りに出かけ、書道展には必ず出品し、あるいは、選挙の際の候補者名、体育祭、球技大会の賞状……と度々他に貢献して来ました。
三、ウマイ人の集りでなく、ウマクなる人の、又、白い紙の上に筆を降ろす瞬間を味わうために来る人の集りです。お気軽に御入部下さい。

数学部

一、練習は水、土曜、夏休み等。生徒自身の趣味をのばし、数学の能力をのばすことにより人格を高めて行くことを目的としている。
二、昨年夏休みには、毎日午前八時半から十二時まで行なって良い成果を上げた。
三、新一年、二年の皆様の熱意と努力により、大いに内容を充実させ、より良い数学部として発展させてもらいたい。

生物部

一、部員は二十名。身の回りの事、興味ある昆虫の生態等を実験、

調査している。

二、特集植物の観察として尾瀬湿地植物観察旅行を行った。○養蜂班―昆虫社会の観察等、○ショウジョウバエ遺伝実験班―簡単なメンデルの法則より高級な実験まで、○微生物培養班―量を検らべる事から純粋培養、○プレパラート製作班（顕微鏡標本製作）に分かれて活動した。

三、これ等をより立派に実験、調査してもらいたい。個人研究も奨励する。女子の入部も大歓迎する。

美術部

一、二十数名の部員、週一回の部会を原則として、自由に活動しています。

二、夏、冬休みは、学校あるいは何処かに出かける、と決めましたが、あまりまとまりは、ありませんでした。

三、できるだけ時間を開放的にし、充実したものにしたいと思います。秋には、展示会を開き、又、校内美化にもつくしたいとも考えています。入部を大いに歓迎致します。

物理部

一、部員は二十一名。活動日は水曜日三時から五時。ラジオ、受信機、電蓄、エレクトニクス、インターホーン、ワイヤレス、タッチリレー、光電リレー、発信リレー、時限装置等を研究している。

二、二月の展覧会にはエレクトニクスや現場実験を行った。

三、むずかしい様だが初心者でも簡単に扱える。新入生の入部を大いに期待する。

文芸部

1、作品集の発行や読書会等。

2、第一回作品集「たわごと」をガリ版刷りで最近発行、最近の読書会では読後感を中心にした芥川竜之介の研究、等。

3、新学期早々に「たわごと」第二号を発行すること。一人でも部員を多くして楽しい部会にすること

詩

挿話

二年A組　吉川　幸男

女の子は、踊り出しました。
男の子は、跳ねまわりました。

お母さんは、ニコニコ笑いました。
お父さんは、パイプをふかしました。

そのお客さんは、楽しくなりました。
神様に皆感謝しました。

――記憶――

遠い思い出です。……
赤い帽子を手にしていました。
その少女の目の奥で、
鹿が輪になつていました。
その少女は、幸福だつたのです。

赤い手袋をしていました。
その少女の目の前に
雪が降り始めました。
その少女は、目をつぶりました。

赤い灯がかすんでいました。
その少女の胸の中に、
美しい天国が映りました。
その少女は、夢を見始めたのです。

明かるいだんろの上に、
その少女への贈物が、
そっとならべてありました。

――東京で――

空襲の後……。
東京の空は黒かつた。
太陽の沈み始める頃、
トマ子の母が死んだ。

その焼跡は……。
煙で一面おおわれていた。

それが消えかかる頃、
又、空襲となつた。
トマ子は……
大声で泣いた……。

——その時——

海にいる魚は、
夢を見ていました。
川のほとりにいる羊は、
空を見ていました。
高い木にいる鳥は、
羽をつついていました。
家の前にいる小犬は、
足をなめていました。
畑の横で私は、
考えていました。
『平和が来る。』
私は、そう考えていたのです。

蛾

二年E組　島崎　麻子

バタバタと空しい羽音をさせて
飛んで来た蛾
どこから来たのだろうか
疲れはて、喘ぎ喘ぎして
飛んで来た蛾よ
突離されながらもなお
灯に全身をぶつけて
何を望み求めるのか
私には分る、その吐息が
　望みを失つて
　ガラス障子にうずくまる
　うなだれた虚ろな瞳が
灯という未来の希望に向つて
何をか求め
何をか得んために
全身を打ちつけて行け
哀れな蛾よ

夜明け

一年B組　宮崎　和子

夜が明けてくる

朝がくる
又新しい一日がやつてくる
道から道へ牛乳配達の自転車が
ガタガタと近ずいてくる
新聞配達の走る足音が
ヒタヒタと近ずいてくる
夜がだんだんと明けてくる
井戸をガチャガチャさせる音や
七輪の火をバタバタ、ウチワで起してる音
ガラガラと戸を開けている音が
一日の始まりの声として
又今朝も聞えてくる
おや、私の家でも皆起き出した
窓をあける音や
顔を洗つている音
ガスで御飯をたく音などが
入り混つて私の耳に入つてくる
今朝も又新しい一日がやつてくる
いただきます、イタダキマス
皆で朝飯のおぜんを囲んだ
モグモグ、パクパク、ああおいしい
ハイおかわり、ボクもおかわり
腹一ぱいに食料をつめこんで
皆家を出ていく、学校に職場に
表通りにはバスや電車の走る音
裏通りには学校に行く子供の
楽しそうな声、自転車の通る音が聞える
新らしい一日がやつてくる
静かな夜から一日の始まる朝がやつてくる
今日も又朝からやつてくる……。

おばあちやん

一年F組　木村保子

おばあちやんは死んだ。
私に美しい
思い出だけを残して……。
雲に向つて言つてみた
〃ね、おばあちやん
もう一度もどつてこない？
歌舞伎もデパートも見せてあげる
ね、未広にもつれてつてあげるから
おばあちやん——〃
おばあちやんが死んで
美しい思い出だけが残つた。

だからよけいに淋しい……。
月にそつとささやいた
〃お月さん
おばあちやん幸せ？
わがまま言つてごめんねって
言っといてね
そして、夢に
時々出て来てねって――〃

〃秋色〃

一年F組　酒井　惇子

西の空も美しい夕
彼方から聞える暮鐘の響き
ガタガタと枯草をつんだ
牛車が通り過ぎた。

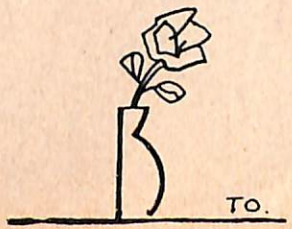
姉さんかぶりの姉妹
竹の背籠がゆれていた。
楽しく語る二人の
頬が夕日に赤かつた。

遠く聞える暮鐘に
金色の穂波もゆれていた
農夫のかついだ犂鍬も
夕日に映えて赤かつた。

恋

二年A組　白石　雅紀

私はあなたにお会いすると
なぜだか胸が苦しくなるのです
誰とお話をしても
決してこんなことはなかつた私なのに
だけど
あなただけは別なんです
今日はこのお話を
今日はあのお話をと
いつも用意しておきながら
いざとなると
なかなかお話ができない
あまりのじれったさに
自分で自分を叱つてみるのですが
これだけは
どうにもならないんです
恋でしょうか
初恋なんでしょうか



哀

二年D組　諫早磨美子

月見草の花手折り
美しといいし君恋いし
ただ蒼々たる高原に
君美しくねむるなり
ああ！
もしこの世に君あらば
かく我が胸のうるまぬを

かの高原に遊びきて
君が手折りしその花の
清くしずかなその花の
宵待草と人のいう
ああ！
その君の今はなく
白き墓前に涙なす

君は雄々しき人にして
我にやさしく口づけぬ
ああ！
その君の今はなく

冷めたくあせし口唇に
そつと手向けしその花の
宵待草と人のいう

この世にあらむ君ならば
いかでつげなん我が胸の中
とこしえ清き我が恋を
いかでつげなんなき君に
ああ！
もしこの世に君あらば
かくわがむねのうるまぬを

かの美しき高原に
君が咲かせしその花の
初恋の花と人のいう
ああ！
その君の今はなく
錦の光に包まれし
君が墓前のむなしさよ

ああ!!
月見草の花手折り
美しといいし君恋いし
かの高原の遠き夏月よ

ふゆのよのゆにて

二年D組　荒川　弘悦

さむいふゆのひ
ひとり
まちのゆにくる。

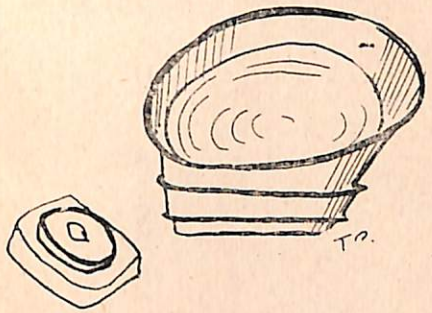
あたたかいすいじようきが
かおを、からだを
あいぶする。

しろいタイルは、
によにんのはだの
かおりがする。

あついゆに
あしひたすとき、
こころにしみるもの……

なにかがしみる。
ふたたび
こころになにかがしみる。

はりつめたはだは
ゆをはじく。



せいきにかがやく。

ゆにはいると
かなしいうたが
うたいたくなる。
ゆにはいると
どこかへ
きえてしまいたくなる。

うつくしい
おんなのおもかげも
かすんでしまう。

わすれられていた
なみだを
あくびがよぶ。

てんじようから
すいてきが
おちてくる。

てんまどに
ほしが
かがやいている。

じゆうにじちかい

まちのゆは
ひともすくない。

おけのおとが
いつぱいに
こだまする。

シャボンは
つかめぬ
ひとのこころとおなじ。

いみのない
つぶやきは
ちちのくせ。

ろうじんが
あきらめの
うたをうたう。

うめみずをだし
くちにてをあてて
のむ。

つめたいみずが
ないぞうをひやす、
いをひやす。

ひとのいない
いたのまに
ねこがいる。

ねむつているのか
ねこ。
さびしくないのか。

ねこ。
いきているだけか。
うまれたから……。

ふゆのさむいよるの
まちのゆで
きようがおわる。

さまよい歩こう

二年C組　杉戸　克彦

さまよい歩こう
冬枯れの野道を
湿つた土の
感触を味わいに
媒煙の
洗滌された

微風に
空腹をいやすために

野の道を
さまよい歩こう
黒土で
喉をうるおそう
陽光を
呼吸しよう

さまよい歩こう
さまよい歩こう
木枯しが
耳を千切ろうと
したら
言ってやれ
お前が吹きやむまで
俺は
逆らいつづけるぞと
雲が
行ってしまおうと
していたら
言ってやれ
この日本から
逃げて行っては

いけないと
俺はきっと
残っているぞと

さまよい歩こう
空の見える道を
こんなに大きい
宇宙の中に
少しでも
俺の曲線で
描いてみせるのだ

さまよい歩こう
さまよい歩こう
全てを空に
投げあげよう
広い空に
日本の空は
青い
日本の空は
広い
さまよい歩こう
どこまでも
さまよい歩こう
いつまでも

隨想

弟

一年C組　花田　潤子

「お姉さま、これなあに。」と弟が夕刊持ってやってきた。
「これ？　これはね、越冬隊の人達が宗谷に収容された写真よ。」
「ふうん。」
これが私の弟である。小学校三年であるが、生意気の程度からいうと、六年生分位は充分にある。弟は我が家の人気者で「ボク」という愛称で呼ばれている。名前は「恭」何故こんな名前をつけたかというと、恭ちやんが外国へ留学した場合、「ミスター・キヨウ」と大変言い易いからだそうだ。

一年位前迄の弟は、青白い顔をした、どこまでも神経質そうな子供だった。乳幼児の頃、ジフテリアの予防注射から、小児マヒにかかった。手はあがらなくなるし、せむしのように両肩があがってしまった。「ちえんちえい、ちゆうちや、いたい、いたい。」という
のが、弟が最初に覚えた言葉だった。小児マヒを始めとして、赤痢にもかかった。又、年に十回も自家中毒で入院した事もあった。余り毎々入院するので、父が見舞に行った時、「たびたび入院してすみません。」等とおとなのような言葉を使って、皆を笑わせホロリとさせた事もあった。

だが今の弟は、元の病弱な子供ではない。血色もよく、人一倍のきかん坊である。二、三ケ月の間に、見違える程元気になったのはどうしてであろうか。私は、あのごみごみした都心から、目黒へ引越してきたためだろうと思う。きかん坊な弟にも、一面涙もろい所がある。「お母さま、ボクせむしなの？　皆がせむしせむしって言うんだよ。」と泣きべそをかいて帰ってきた事もあった。

弟は二重まぶたのどんぐりまなこの眼をしている。そして、目をくりくりさせて話をする。その話にも、近頃、所々に、「概して」「ともかく」等というむずかしい言葉が混ざってきた。

弟は宿題をすませ、明日の仕度をして、玄関に置かないと遊びに行かない程几帳面な性格を持っている。いつも私が帰ってくると、もうキチンと玄関にかばんが用意してある。又、彼は、機械いじりが大好きである。何でもそこいら辺に置いておくと、こわされてしまう。母がミシンをかける時など、じっと機械に見入っている。

弟について一つだけ傑作な話がある。我が家の近所に、脳炎にかかったため少し頭がおかしい、ものすごく太ったのり子ちやんという女の子がいる。「お姉ちやん。どこ行くの、おつかい行くの。」と金太郎さんのように真っ赤な顔をしていう。ある日、母が冗談に「ボク、のりこちやんをお嫁にもらったら」といった。すると弟は「うん、かわいそうだからもらってあげようか。だけどね、もう一人お嫁さんもらってもいい？」と小さな声で母に聞いていた。この事を思い出しては皆で笑っている。

今も弟は「クワイ河のマーチ」を口笛でふきながら、「科学クラブに見入っている。

負けられません千恵子には

一年組組　渡辺　静枝

小学校に入学し、最初に文らしきものを書いた時の題が「家族」であつたのを覚えている。千恵（妹）について今までに私は何回書いたかしれない。その都度に家族は知りすぎているので書き易いが表現しにくいと思う、がしかし、私は又ここで千恵について書きたい。千恵は高村光太郎の智恵子でも田宮虎彦のちえ子でもないからだ。これらをバラに譬えるならば私がこれから書こうという千恵は春に小道の端に咲くすみれに相当ずるであろうか。それもしおれかけたすみれである。何故かと言うと、土地が悪いのである。花よりもささえる土地が、でこぼこでは、水分が少なくては咲きたくとも咲けはしまい。良い肥料、文才という肥料が豊富な土地ならば、色のきれいな三色スミレくらいに変わる事を私は信じて疑わない。

花も土地も休みなく生長している。中学一年の時に私のみた千恵はこんなであつた。私はこれを詩に託した。

ギーツと音がした
いつもいたずらする妹の顔が浮ぶ。
それっきり音がしない
さらさらと気持よくペンが動く
ギーツと又音がした
「だれ、千恵ちゃん」。
急いでドアを開ける
だれもいない、もどろうとすると
「お姉様」という声
又ドアを開ける。だれもいない
ドアの後をのぞいてみた、妹がいた。
「いやな子ねえ、宿題しているのに」
「ごめんね」と小さく言つた
「いいわよ！」と言うと
まつていたというように
「ママは」と開いた
「鈴木さんよ」というと
カタカタと音をたてて
階段を下りていつた
いたずらするけど
私にとつては一人の妹

この頃の千恵は、なんでも姉の言う事をきくかわいい子だつた（母は私もその頃は、親の言う事をきくかわいい子だつたという）でも今は、かわいいと思うのは数えるほど、にくらしいのも通りこして、いかにしたら姉という位置を保持していけるかということを考え考え行動していかねばならぬ程になつてしまつた。私だけではなく妹におさえつけられている人が他にもおられるのではないでしようか。第一に勉強で負けました。頭の悪いうえにやらないのですから仕方がないと思いますが。神聖なる父母は、私の中一のテストを並べられます。高校はむずかしいとも、言えず、妹のえばつた顔をながめるのみが私に赦された特権でしようか。第二に手先の器用さに負けました。お習字も、図画も、そして又家庭科も上手なので

す。お免状も、大分たまつた様です。オルガンを与えられて、まがりなりにもひく事ができるのも、くやしい事のひとつ。神はどんな考へで一人の妹にばかりステキなプレゼントをなさつたのでしよう。第三に背も靴も私を追い越していきました。シーちゃん（千恵は私をこう呼びます）お洋服も靴も小さくなつたらあげるわよ等とけんかした時には必ず皮肉を言います。

でも私は妹には負けられません。世間では少なくとも姉といわれているのですから。だけど千恵はお人好です。それも利朽なお人好。昨日もこんな事がありました。私は生物のテスト、妹は英語があるというので、父母を渋谷に追い出して？　仲よく勉強している最中、不注意にもインクを畳の上にこぼしてしまいました。勿論私がです。これは大変とばかり雑布でこすつたが黒インクなので落ちない。一夜付でやるのを知つているのか、いないのか千恵はすましているので、よけい気がせく。「落第点でも、もらおうか」と、なんのきなしにしやべつて、しまつたと思つた。いつもの千恵なら、もう自分でこぼしといてとか、毎日本ばかり読んでいるからだとか、総攻撃を浴びせられるのですが、さにあらず、お勝手に行つたかと思うと、クレンザーをもつてきて「シーちゃん、いつもの通り一夜付けでしよう。ふいてあげるわ」ですつて。変な気持でした。そして感謝感激でした。千恵がふいている時に父母が帰つてきた。父は千恵がやつたとおもつたのか、「千恵、少しは気をつけなさい。机や本箱をもつときちんと片ずけてればそんな事にもならないだろうに。」と注意された。私は、だらしがないのは大嫌いだが千恵のときたら、足温器の中にまで何かはいつているという始末なのだからやりきれない。私がやつたとも言いそびれ、千恵も私じやないともいわないでおかしいとおもつていたら寝る時になつて「シーちゃん、作文明日書いてね。」ですつて。朝になり私がやつと母に告げると、「さては、何かたのまれたわね。」といわれた。「エプロンの白さが、白状させたのよ、あとはエプロンに聞いて。」といつてにげた。母は私がやつたのを知つていたという。それもそうだろう。立ち机でなければ、あんな風にはこぼれない。おかげで叱られずにすんだが、作文の題が「姉」だつたのには、何と書いていいのか、ひとりでに顔があつくなつた。

大きなまるい目くるくるさせて
大きな夢が映つている
千恵と呼ばれて返事して
一寸にくらしい、私の妹

くろい瞳に短い毛
きのうも明日もかわりない
いたずらばかりしてる
笑わせ後の我が家のエンゼル

小鳥にエサをやるのを忘れ
今日は千恵が食べないと
小鳥にごめんね頭を下げる
一寸よいこで、やさしい子

青春家族の越智さんは文のうまさは、真実とうその間にあるといつた。私のは真実と真実の間になつてしまつたが、書き手より読み手、水気をたくさん含んだ意気のよいスミレにして読んで下さい。

秋に思う（郊外の転居地にて）

二年A組　白石　雅紀

初めて郊外の秋を迎えるにあたり、私は、偉大な時の流れにつれて生ずる自然の変化に、少なからず胸をときめかせられています。

私は、できるだけ多くの時をみつけて、将に去り行かんとする晩秋と親しみ、永遠から来て永遠に帰つてゆく時の神秘さや、それに乗つて変遷する世の物事の不思議さを考えたり、また淋しく色ずいた山を見ては、生命の神秘さに打たれ、この世に存在するもの総ては、どこから来てどこに帰つて行くかなどと、とてつもないことを考えたりしています。今は見るからに淋しげな樹木達も、かつては青春の躍動に心をはずませた事があつたのです。私はフト、それを、近頃めつきりジシ臭くなつて来た自分と関連させて考えました。夜の散歩は、友達のない、孤独な私の数少ない楽しみの一つでもあります。駅前に並ぶ限りない商店の灯の抱束から解き放される時、私の町の道路の舗装が切れます。群がり聳える樹木の中を通り過ぎると、黒々と道の左右に展開する田畑に眼を奪われ暫くは心嬉しい感慨で恍惚とした気持になれます。瞳を少し上げて、四方を見回わすと、影絵のように黒く横たわつた山々が、私を取り巻いているのに気付きます。その山々の中腹には、点々と小さな灯が掛つています。小さな灯ではありますが、それに包まれて呼吸している人々が確かにいるのです。このような大自然の片すみにも、人生の喜怒哀楽がある事に、何故か私は喜びを感じるのです。それから私はおもむろに視線を、数万年の彼方で光り輝いている清らかな、小さな星の中に投与えます。月が出ていないせいもあつて、今日の星の輝きは、いつにも増しているようです。夏、裏の山に登り、月の光りを頼りに詩を書きながら見た星や、雑草の上に寝ころがり、星座表と対照しながら憶えた星の位置なども、ずい分変つてきました。山の頂きで瞬く星は何故あんなに美しいものなのでしょう。私は、大人の世界に近ずいてゆくことにより、いつのまにか汚されてしまつている、心の清純さに気がついた時、取り返しのつかない過ちを犯してしまつたように思つて、無暗に悲しく思いました。いつまでも清らかな心の持主でいたいと思つていたからです。しかし、そんな私のささやかな願いは、時が躊躇することなく流れることによつて、無慙に打ち壊されてしまい、後に残つたものはと之えば、世間の悪臭を身につけ……。呪わしくも変わりはてた、私の精神と肉体以外の何者でもないのです。こんな私を慰め励ましてくれるのが、昔も今も変らぬ美しい光でもつて、闇にきらめいている星達なのです。それらは、私の、この世では唯一の故郷なのです。彼等は、彼女等は、私に幼き日の思い出と、その上に立脚する夢と希望とを、与えてくれるのです。沢山の星が頭上で瞬くのを非常に満足な心で眺め、それらに見守られながら、私は暗い闇の中に続く畑中の道を彷徨しました。ひつそりと横たわつた群山も、今は眠りに入つたようです。星の冴えが増せば増すほど、大気が澄み渡り、しま模様の山々がすつかり冬らしくなるのも、ほど遠くはないでしよう。

郷愁

二年C組　住川　節子

「もう一度いつてみたい」と思える故郷があるということは、たとえそこへ再び行くことが出来ないにしてもすばらしいことである。

幼年時代を過ごし後までその記憶を脳裏に止めておきたいと望むならば、故郷は美しく静かでなだらかな自然の起状を持つていなければならない。私にはこれらのすべてがある。それは実に純な真白な心でなくては感じ得ない幼年期の淡いファンタージーであり、美への基礎でもある。四季は色彩の魔法使いであり、時は単純なものを複雑なものへと変化させる微生物のように思える。

畠に桃色の陽炎がゆれる頃、純白の八つの花弁を持つたほつそりした水仙がゆるやかに蕾を開き始める。細い長い青黒い葉は風にパラパラとなつていた。その顔をシャンと上げて黄金色の、小さな雌雄を誇らしげに持つた可憐な花は私の理想であり羨望であつた。

家の前にあつた大きな川は私に寛大なる贈り物をおしげもなく運んで来てくれた。私は小さなあみを持つてそれらを待ち伏せた。赤や青や緑や茶や黒や白のきらきら光つた小さな石を、私はバケツにしこたまためこんでいた。特に私は真白なつるつるの、こまかな丸い石が好きだつた。しかしそれらの宝石を私は水から上げることは決っしてしなかつた。美しい輝く透明の光沢がたちまちのうちに消えるということを百も承知だつたからである。

時には黒い円満な背をした水すましを手に入れることもあつた。彼はもの悲しい甘いソーダ水に似た、いいかおりを持つていた。戸惑つて水に波紋をつくつたかと思うと、水面を我がもの顔にすべり、すべつたかと思うと、又、戸惑つて周囲に大きく波紋をつくつていく、彼は実に可愛らしい愛すべき生物だつた。裏庭には古びたつるべ井戸があつた。苔むして湿つた青さが美しかつた。朝は黄金色に、昼は緑色に、夜には鉛色へと丸い形をした水は変つた。そこには声の精が住んでいた。アマノジャクであり、模倣者である彼女はひどく、私をこわがらせ戸惑わせた。

秋になると川の土手に沿つて真紅のまんじゆしやげの花が一面に咲いた。村の子供達が「毒花」とよんでいたのは実際に毒を含んでいるばかりではなく、あまりに鮮やかな怪しい紅さを持つていたためだろうか、私達はよくその長い茎を小さく折つて膝まで垂れるような首飾りをつくつた。青くさい薄緑色の汁が手についてはなかつた。

青い青い広い広い畠、熟した柔らかな柿。その木にぶらさがつていた太い大根。絨氈のように畦道を彩つていたクローバーや菫やたんぽぽやれんげ、そして茶色の重い屋根をかぶつた百姓家が点々と散在していたあの景色。

すべては幼い心に映って離れない。しかし、淡いクリーム色の霧につつまれたノスタルジアである。

三生年へ

一年E組　増井　円子

ありがとう……諸君。

何に礼を言うのかつて？　落着き給え、これからゆつくり話すから。諸君は自分の生活を反省してみた事があるかい？　学校生活に於いての自分の態度を。諸君達各々の行動がどれだけ我々に影響を及ぼしているかを。まずあるまい。九十九、九パーセントまでないだろう。何故そんな事が言えるかつて？　諸君考えてみたまえ。反省する者が、授業をエスケープーたり、時間外（昼時期外）に口を動かす事なんかできるもんか。諸君の中に高校三年間の学校生活で、この両方とも実行していない者は居ないだろう。もし居たら、その人の顔を拝んでみたいものだ。

国語教科のH先生、我々のホームに来てよくのたまわれる。「高校教育は人間形成のためにある。」と、すなわち、先生の説によると、「学校」イコール「人間形成の場」となる。その人間形成の場所で三年間修業を積んできた諸君が、「さぼりの天才」とは、いやはやまつたくみあげたる話ではないか。しかし私は、これを全面的に否定するのではない。むしろ、学生時代に一回でもいいからやつておくべきものだと思つている。（もちろんさぼるにも一応時間を考えなければならないが……。）さぼつて映画にでも行つてみたまえ、その時の恐怖と痛快さにまさるものはないだろう。一年のくせに生意気だつて？　いやいや誤解しないでくれ。これらは皆私の想像する所であり、まだその経験は一度もない。ゆくゆくは一度実験しようと思つているのだが、私のようにか弱き女性にとつては、あまりにもスリルが大きすぎるのではないだろうか。例え、私が実行したとしても校外へ遊びに出るという大それた事はできないだろう。せめて芝生で小説読みとか、図書室での書物さがしにとどまつてしまうに違いない。或いは好きな科目を勉強するかも知れぬ。何にしても「さぼり」は、他人に迷惑をかけないという一つの長所を持つていると思う。しかし時間外に口の運動をする事は、他人に大きな影響を及ぼす。例えば、隣席の者がやつていると、何となく腹が立ち、又空腹を感じさせられる。それを三時間目の休み時間にでもやられてみたまえ。自分もついふらふらと弁当のふたを開けてしまう。これがいけないのだ。自分だけならともかく、他人をもさそう状態になる。「以後つつしみたまえ」と言いたいところだが、諸君にとつて有利な事実がある。

ある三年生の例だが、彼は三年の始め頃は大へん温和しく、指一本ふれてもよろけてしまいそうな、たよりない男性に見えた。毎日の生活の規律を正しく守り、やがて訪ずれる受験に目指して、黙々と勉学に励んでいたらしく、顔も青白く青年らしい若々しさを見る事ができなかつたのだ。その彼が、この頃になつて、三時間目の休みには堂々と、友達と長方形の金属性の物のふたを開け、パクついている。そして授業があつても帰つてしまう。やはり悪友？　に感化されたのだろうか。しかし、現在の彼は頼母しさを体全体に漂わせているように思われる。最も時々子供のようにはしやいでふざけているのを見かける事はあるが……。これは最近彼の毎日の反省をおこたつている証拠だと思う。

諸君は真似しない方がいいよ。やり方を間違うと、とんだ目に会うだろうからね。「とんだ目につてどんな事か？」と諸君は聞きたいだろうね。私も話をしてみたい。だけどここでは諸君の判断に任せるよ。話も長くなつたからね。

それでは、最後に私の言いたい結論を下す。「下級生の言う事なんか」と馬鹿にしないで聞いてくれ。何か得る所があるかもしれないから。

人間にとつて自己を反省する事が、どんなに大切かは皆知つていると思う。しかしちょつとその反省をおろかにした時、自分の人間性が一段上がる時もあるという事は、一般に知られていない説である。依つて私がとなえるから、よく憶えておきたまえ。人は皆、コチコチに固まつた人間より、多少いかれたところのある人間の方を好むのではないだろうか。諸君だつてそうに違いない。私は諸君の友達がそれらの事実を示してくれたのでそうなることができたのだ。私は心から諸君に感謝する。一年近くの学校生活で社会の一端を学ぶ事ができたのだもの。

人　間

一年C組　諏訪　修一

夕暮の西の空は真赤に燃えている。家々の屋根の背景の夕焼けは美しい。その夕焼けの中に、今、真赤に焼けた火の固まりが沈んで行く、これがごみごみとした東京の夕暮であろうか、どこか西洋のおとぎ話に出て来そうな幻想的な光景、この別世界のような景色に、幼い日から現在迄何度心を打たれたことか……。僕にはこの夕焼けと、夕陽の鮮かな色を見て遠い過去のことを思い出し、懐かしんだり、又遠い未来を夢見て色々の事を空想したりするのがその日一日の疲れを癒す唯一の薬である。

『夢を持つ人間』それは何と素晴らしい人間であろう。夢を抱く人とは、未来を常に美化して考えている一種の理想主義者も含む。とにかく目を輝かせて自分の前方を眺める人間である。

夢を抱けばその夢が必ず実現されるとは限らない。しかし、実現できなくても良い、ただ実現する様最大の努力をする事である。たとえその夢が実現しなくとも、夢を抱くことにたまらない快感と満足を感ずるのではないだろうか。我々の中には常に現実の声が囁いている。

「夢はあくまでも夢でしかないんだ」「現実はこうなんだ」と…。確かに夢と現実は大きな食い違いがある。現実の声に耳を傾けている内に、夢を抱く事が愚かに思えて、次第にそれを抱かなくなるという状態が多分にあるのではないか。現実を全然無視せよといつているのではない。夢を夢として考え、現実とのバランスをとりながらも夢を忘れぬことが大切であろう。

『孤独』という言葉がある。孤独というと何かあまり良い感じを与えないらしいが、孤独とは誰にもある人間の一つの姿であると思う。人間にはその根底にいつも独りで生きて行ける自身がなくてはならない。仲よくしている人達を見た時、寂しさを感じるかも知れぬが、それは人間に与えられた宿命である。仲よくしている人々も皆別々の人間であり、孤独という面を必ず持つている。どんなに朗

らかな暴れん坊なおしやべりな人間も、一人になつた時、ふと、いちまつの寂しさを感じる時があるのではなかろうか。だがしかし、ことさらに孤独を重んじ、常に自分を孤独にしようと努めている人もいる。それはやはり心に自分のみが知る寂しさの原因があるからであろう。僕にもふつと一人になりたいと思うことがある。どこかの駅から汽車に乗る。着いた所が新鮮な空気が満ちている田舎である。小高い丘の上に登ると、そこは一面に緑色の草が茂つて居る。その草の上にごろりと横になり、さんさんと降り注ぐ太陽の光線を一杯に浴びて、じつと目をつむる。いやなこと、苦しいことは皆忘れる。ただ楽しい事のみを頭に描く。こんなことを考えたことが今迄に何度かあつた。今でもこれは気分がすぐれぬ時、頭に浮んでくる夢の一つである。孤独の寂しさを解消する為には友人を作ることが最も効果的である。我々は小さい時から色々の事を友達と共に行つて来た。小学校二、三年の頃、竹の棒切れを持つて来てチャンバラごつこをしたこと、六年生頃の当番の時、ガラスを割つたのを皆でかばつてやつたこと、中学の時、ただ何となく友人と二人で夕方の街中を散歩したり、夜更けの路上でいつ迄も将来のことを語りあつたこと、夏休みにはサイクリングに行つたり、キャンプに行つたりしたこと等、これらのことは皆友人が居たから出来たことであり、面白かつたことである。友人は多くある、しかし、真の友を得ることはそうたやすいことではない。「友愛」ということばであらわされる友情、常に何でも打ちあけて話し合い慰めあえる、困つている時には、ただ虚栄心からだけでなく心から助け合える、そんな純粋な友愛が我々の理想とするものではないだろうか。成人していくにつれて、皆がそれぞれ違つた社会へと飛び込んで行くので、散り散りばらばらになるであろう。しかし、たとえ十年間会わなくてひょつこり出会つても、すぐに冗談の一つも言える様な豊かな気持をもつていたいものである。

我々はいやおうなしに団体生活をしている。二重にも三重にもの団体生活を余儀なくされている。我々は一つの国家に属し、町に属し、学校に属し家庭に属している。いわば我々は常に他人と一緒に一つのかたまりの中で暮しているのである。だから多くの人々の中には、とかく集団生活になじみにくい人間が少なくない。ところが自分の性格を知つて居て、それが集団生活となかなか折り合えずに、苦しんでいる人間も居るのではなかろうか、その原因がどこにあるのかは僕は心理学者ではないからわからない。学校生活に於ても、教師が教え、生徒がただばらばらの個人として授けられているだけで良いのならば、皆が互いに話し合つていく必要もないであろう。しかし、意義ある学校生活というものを創り出していくには、お互いの話し合いの場をもたねばならぬ、その話し合いの場が現在のホームルームであろう。が、しかし、現在のホームルームが、その重要な役割りを完全に果しているとは僕には思えない。かた苦しくならず、自由な雰囲気を作りながら、その中に於て集団生活者としての我々の意見の交換や、提出したりすることが大切であり、常に行われていなければならぬことではないだろうか。

人間には賢明さということが大切であるが、しかし、賢明であることも非常に難かしい。

フランスのモラリストの一人であるラ・ロシュフコオの言葉がある。「他人に対して賢明であることは、自分に対して賢明であることよりも易しい。」他人のあらというのは目につき易い、しかし

自分の欠点を自分で発見するのは、とても簡単には出来ないというのである。これは我々の痛い所を突いた言葉であると思う。自分のあらさがしが他人に対してと同じ様に出来れば、それは賢明であり、立派な人間である。

人間が一生の中で理想や夢を持つて進んで行く時に於て、多くの現実との矛盾に落胆し、或は、幾多の苦しみにぶつかるが、その道が険しければ険しいだけ平然としてそれらに負けず、真直ぐな道を突き進んで行く人間こそ、真の勇者ではないだろうか。誠実に堂々と胸を張つて、未来がいつも我々の目ざす所であれば、そこへ向つて心を晴れ晴れとさせ、足どりも軽く、真直ぐに進んで行くことが出来る人間が、理想的なかつ宗全な人間である。

論文

我々の進むべき道

一年D組　村　光二

一、書く至つた動機

大分前の朝日新聞の学芸欄に、本多顕彰氏の現在の大学生の読書調査の結果についての文があつた。その大意は、大学生が最近読んだ本、感銘をうけた本が「挽歌」であり、「美徳のよろめき」であるという結果に驚いて、戦前の大学生は、例え読んでなくてもゲーテの「ファスト」等をあげたものだと言い、戦後の大学生の教養と、道徳の低下を歎いたものであつた。そして今の大学生を教えたのが小・中学校の教職員であり、それを教えたのが現在の大学教授達であるから、文科系大学教授は今こそ、その責任をとれというものであつた。

これに対する反響は大きく、その後しばしば朝日新聞の投書欄でその賛否が戦わされたが、その締括りとして「大学生の教養」という点でまとめてあつた。これをお読みになつた本校の諸君はどう感じただろうか。本多氏のいう、今こそ大学教授は責任をとれという事はともかく、戦後の大学生の教養と道徳の低下については、多くの問題を残しているようだ。これは大学生に限らず、高校生又然り、戦後の青年の問題である。

終戦直後の三、四年の学生の娯楽面は、最低限度の範囲を辛うじて維持していたものであつたが、今日では娯楽の存在は相当の比重をもつてきた。赤や青のライトに照されながら、バンドの甘いメロディーに合せて、派手に踊るホール通いの学生があり、町を歩けば喫茶店の中は学生で満員、不健全な薄暗い中で議論しているものがあり、夏ともなれば海水浴場に慎太郎刈りの青年達が横行し、冬はスケート場に集まる。狭い路地で高校生同志が派手に立回り、あげくのはてに、中学生が授業中の教室に殴り込みをかけたという。街の映画館はどぎつい映画をかけ、これを影響をうけやすい青年が見る。このように戦後の青年の道徳の低下は至る所で見られ、巷に汎濫している。近所の小学校前後の年いかない子供達の話を聞いてみると、彼等のあどけない口から「赤胴鈴之助」「中村錦之助」と放送劇の主人公や、俗に言うチャンバラの俳優の名が飛び出す。そして二口目には「馬鹿野郎」が出る。これはマスコミの威力を物語るものかも知れない。しかし、こんな小さい時から悪い影響をうけて

育つては、映画館やホール通いの学生がその中から出てこようと不思議はあるまい。

だが一方、日夜分厚い何冊もの参考書とせつぱつまつた時間に追われながら、青い顔にはち巻き締めて、必死に勉強している浪人がいる。

来る日も来る日も灰色で一面に塗りつぶされている。彼等には青々とした野山も、燦々と降りそそぐ太陽も目に入らない。唯一の希望である狭き大学進学への門に向つて、馬車馬の如くただひたすらに走るのみである。この学生の現状を諸君はどうみるか？書ここにもいろいろな問題がある。

さて昨年入学して間もない頃、「る、くーる」5号が配られ、読んでいくと「受験勉強―卒業に当たり後輩諸君へ―」という題で奈良茂男先輩の文があつたのを諸君は覚えておられるだろうか。それには「目の前にぶらつく〃大学受験〃という事を目標に、高校に話を送つてしまつたといえばそれまでです。」と述懐し、「そもそもこんなに苦しんで大学に入らねばならないのは何故でしょうか。それはただ人口過剰といえるのかも知れません」と言い、「我々はこの狭き門を通り抜けなければならないのです。ただそれだけが自分に課せられた責任であると信じています。」とはつきり割り切つている。そして自分の体験を通して後輩の僕達に注告してくれている。最後に「今はただ一途に目的の大学へ向つて突進する気持で一杯です。そして大学生活を夢見ながら……。」と筆を結んでいる。

僕はこれを読んで深く感動すると共に、先輩の御成功を心から祈らずにはおれなかつた。何か良く判らなかつたが、とにかく何物かが当時の僕の心をゆさぶつた。

それに新聞「まつばら」第二十九号、これは昨年の夏休み前に発行されたものであるが、特別寄稿として中村学校長がお寄せになつた「高校生は如何にあるべきか」という論文があつた。「第一に高遠な理想を抱いて、これをあくまで追求し実現しようとする情熱をもつ事。第二にこの情熱に加えて、理想実現のために、不断の勤勉と努力とが学業に実践されねばならない。第三に運動によつて身体を鍛える事である。第四は高校生らしい人間となる事である。…（略）…八五〇名の全生徒の深い反省と奮起とを念願して止まないのである。」と、高校生の在り方を示して下さつた。これも心に感銘を覚えると共に何か僕の心の中にたまつているものを表わしてみたくなつた。

以上本多氏が主張するところを含む、戦後の青年の教養と道徳の低下の問題、現代の学生の実状についての問題、中村学校長のお聞きになる高校生の在り方の問題について、これらの問題を総合して〃我々はどう生きるか〃という観点から一言述べたいと思うのである。未だ学生として少し顔を突近んだ位の者で何も知らない僕が、右のような大それた問題を書こうとする事をお許し願いたい。しかし、「一寸の虫にも五分の魂」の諺にあるように、どんな者にもそれ相応の考え方や感情はある。そこで浅薄ながら、僕は僕なりの頭に思いつくままの考えでペンを走らせたいと思う次第である。

二、我々はどう生きるか

最初に戦後の青年の教養と道徳の低下については、誰がみても事実であると認めるだろうと思う。東大の某教授が、現代の大学三年は学力の点で昔の高校の三年に相当すると言つた由であるが、現代

学生の学力低下という事は最早一般的常識となつているのである。もつともこれは終戦後まもなくの話で現在はどの程度だかは判らない。この所謂学力の低下は、現代の学生が暗黒時代を経て来たという事に由ることは論をまたない。この暗黒時代とは詳しく云えば、一九四三年十二月一日から一九四五年八月十五日迄である。一九四三年十二月一日は昭和の学生にとつて呪うべき日である。それは即ち大学、高専の文科系統の学生は、この日徴兵延期の特典が撤廃され、大平洋戦争に参加せしめられた日であつた。無論所謂この暗黒時代はこの二つの日を挾む数字で表された何百日と限る事は不可能だろう。その前後にも、完全に自由な学問生活を送る事を許されない時期はあつたが、少くともこの暗黒時代は、学生にとつて学問に対する情熱、及び意志は一〇〇パーセント否定されたという事がはつきり云い得る。いや学生のみならず婦人も子供も然り、一般人すらこの戦争という巨大な黒い幕に包まれて、目はあつても正しく物が見えないあきめくら同様になつてしまつたのだ。ここには正しい教養も道徳もない。そこにはただ上から押し附けられた支配者に都合よく出来ている偽の教養と道徳があるのみではなかつたか。日本が如何にあるべきかと若い血汐で考えていた青年や学生の多くが善んで戦争に参加したのは無理もなかつたろう。しかし、今の大人が例え弾圧されとはいいながら、戦争反対を最後迄叫んで、これを止めさせる事は不可能だつたのであろうか。この暗黒時代の学生の学問生活は悲惨なもので、思想が限定され、英語が殆んど廃止され、勅諭が凡ゆる書籍の中に潜り込み、戦陣訓が高専の入試に出て来る様になつたという。こんな中で誰が正しい教養を身につけられようか。実に憎むべきは、凡ゆる事物を破壊する戦争である。青年の教養と道徳の低下の原因は戦争をもつて第一点とする。

現代の学生が呼吸している社会には、往年の如き平和や安易さがない。急速なテンポと強烈なムードは、直接に社会生活に関心していない学生をも捲き込むのに十分である。それは希望あるものも希望なきものも、皆等しく襲いかかつているのである。わけて我々学生は昔のように学を楽しむなどという事は、到底許されないのである。ことごとくが猛烈苛酷な競争と生活慾の火花のうちにある。それが即ち入学難であり、就職難である。然しこれは安易なセンチメンタリズムでは律せられない事である。これがあるが故に、社会は進歩し向上しつつあると考えるべきであろう。恐らく今後はこの傾向は益々増大されると思う。だがこの激烈な社会の中で、正しく真の学問を追求する学徒がはたして何人いようか。中学生は一流大学へ有利な有名高校へ殺到し、そこで猛烈なる受験勉強を強いられる。受験勉強は大学へ入る為の勉強であつて、真理を追求する学問ではない。時代と共に歩み、時代と共に考えなければならぬ学生には学問は、受験の為とか、身の飾りとか、身栄とかでは断じてないのである。高校では受験の為に古典を読む暇がなく、大学生になると今度は先を見透して就職試験の準備を始める。こうして学生時代は試験に追われて世の中に出される。それで手紙一つ満足に書けない文科の学生が生れ、依頼文が書けない商科の学生が出る。社会人になれば余裕などあろうはずはない。これでは一体何時教養を身につけたらよいのだろうか。以上述べた社会の激烈さは正しい教養を身につける時間と余裕を与えない。これが原因の第二をなすものである事を信じる。

第三に我々及び社会が考慮すべきは享楽的方面であろう。学業に

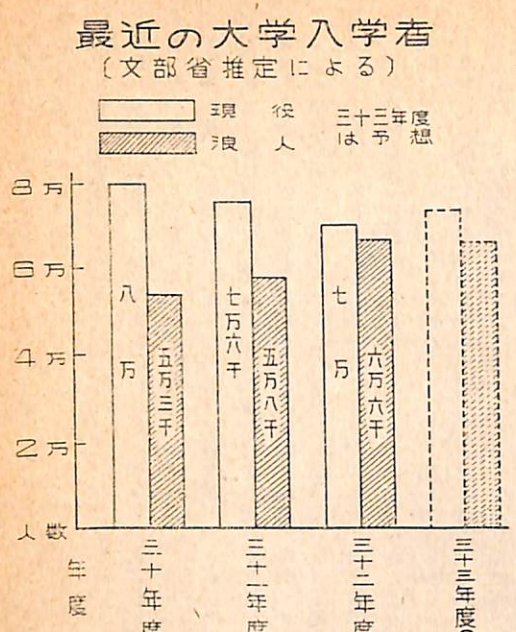
対し真剣味に乏しい者は、ややもすればこの社会的風潮に捲き込まれて頽廃の善びと楽しみを追う者に変つてしまう。この学生の享楽的方面には次の特色がみられる。第一に経済生活に追われて、昔の学生のようにのんびりとした気持で娯楽をエンジョイ出来なくなつた事。第二に娯楽に手を伸ばせる余裕のある学生と、そのような事には全然余裕のない学生との層が明確に分離してしまつたこと。第三に娯楽の傾向は一般的に大衆のそれと全く同一であることなどである。

本題から離れるがここで少し享楽について述べよう。享楽は寂しい苦しい人生のオアシスである。その寂しき人間にとつて、潤いと光と慰めとをもたらす享楽の存在こそは、人間の生活の続く限り永久に滅亡しない人間の歴史を明るくする光明であると思う。享楽についてそれ自身道徳的でないと考える人達がある。然し人間の生、そのものが決して徹底的に快の要素を除くことを許さないという。睡眠や飲食の如き行為から読書の如き精神活動に至る迄快の要素を含んでいるといわれ、それどころではなく、労苦そのものが快の一面を伴つているという。快が悪いのではない。いや、快は生を高揚させる。けれども快の過度が悪いのである。我々が快に耽り、快の奴隷となるのが悪いのである。ところで、ある本によれば快には様々な種類の存することが考えられなければならないとある。アリストテレスによれば快楽に関する徳を節制と言う。節制的な人は過度に快を求めず、然し快が健全な生に役立ち、或は少なくとも妨げず、なお資力を超えない場合には然るべき仕方でそれを欲求する。快を過度に求めることは放埒という悪徳であるが、快に無感覚なのは人間的でない。この両極端の中庸が節制である。節制が破れ、放埒を過ぎると堕落となる。堕落とは何をいうのであろう。我々青年の酒を飲む行為や煙草を吸う行為を堕落であるとする。ダンスホールに通つてダンスに興じたり、異性と遊び廻つていたり、学校を怠けて青春の時間を喫茶店や、盛り場の人混みの中で過ごしているようなことさえ堕落であるという。ここで考えなければならぬ事は、それがもつぱら我々青年に対してだけ云われ、同じ行為があつても成年者のそれは必ずしも堕落とは呼ばれない事である。そこに明らかに年令を階級つけて見る思想がある。しかし、酒を飲んだり煙草を吸つたりする行為は、単なる人間の自然の性理的欲求に基ずいてあるものに過ぎない。ダンスに興じるのも、異性と遊ぶのも、同じ性質のもので、成年者の場合と区別を立てて我々青年には不当であるとするいわれはない。けれども人間的に未完成な時期にある青年にとつて、それが害のあるものと考えられ、我々青年にふさわしくない行為と認定するのである。一面には社会が青年を重んじている証左でもある。我々の行為が我々自身によつての堕落となるのは、それが自己の在り方を見失つたものとしてある場合である。我々の行動に対して批判の眼が厳しいのも、青年に期待するものが多いのにほかならないのである。

三点にわたつて現代の学生の教養と道徳の低下について述べてきた。勿論この外にも原因はいくらでもあろう。然し、この三つがこの問題の根幹となるものである事を確信する。

次に現代の学生の実状についてであるが、これは前に述べたことがらと重復しているし、教育制度に迄及ぶ大きな問題であるし、それをどう解決し、どう処理するのが良いかは僕には未だ判らない。

それにもかかわらず、学生愚連隊がはびこり、半学生が殴り込みをかけるその行為が良いはずはない。ここでは我々の高校生が一度はその洗礼を受けなければならぬ人試の問題についてだけ取り上げてみよう。深刻な大学入試はますます学生を型にはまつた、スケールの小さな、仲間を蹴落す事を平気でするような学生を作つて行く。世間はこの激烈な入試を、受験地獄という。この言葉は用いたくないが敢えて使わして貰おう。「そもそもこんなに苦しんで何故大学へ入らなければならないのでしようか。これは入口過剰のせいかも知れません。」と、受験を目前に控えた先輩は前に述べている。これが受験生誰しもが同感し得るところであろう。この受験地獄を裏附ける数字を追つてみよう。文部省の推定では大学受験浪人の数は大



体十三万名で、一方全国の公私立大学入学者数は昨年度で十三万六千名だから、大学受験者の二人に一人は浪人する割合となる。このように浪人が多いのは、競争率を高めて入学試験を難しくさせる。入学試験が難しいので要領本位の試験技術を身につける事が要求される。それには浪人しなければならぬ、といつた悪循環めいた傾向が生れる。この傾向は最近増大している。最近の大学入学者はグラフの通りで、今や入学者数では浪人が現役組を追い越そうとしている。これは一体どういう事を意味しているのであろう。六・三・三・四の新教育制度を確立した人々は、この浪人問題をはたして予想していたのであろうか。この浪人問題は一部有名校では更にひどく、特に東京大学では昨年度の入学者二千二十九名の内、現役五百六十五名に対し浪人は千四百六十四名で実に全体の七十二パーセントを占めており、一橋大学ではこの比率が八十パーセント近く迄いつている。この為一部の有名高校では最近補習科を設けて浪人に受験勉強を詰込んでいると聞く。つまり、浪人は最早常識となりつつあり、六・三・三＋αの教育制度といわれる事は、極めて遺憾なことである。この入試地獄は浪人問題を生んだ一方、この影響は受験生だけにとどまらず、外にいろいろな複雑微妙な問題を残している。義務教育では職業コース、進学コースに分けたり受験の補習授業を行うことは認められていないのに、多くの中学がそれをやつている結果、いろいろ面倒なことが起つている。また受験生と就職する者とは互に反目するという好ましくない事実が地で起つているという。そしてこの入学難が毎年入試シーズンになると、若く将来性のある青年の生命を奪つていく。最近の新聞には相次いでいたましくも若い生命を断つた受験生の記事が出ていた。我々学生にはこの

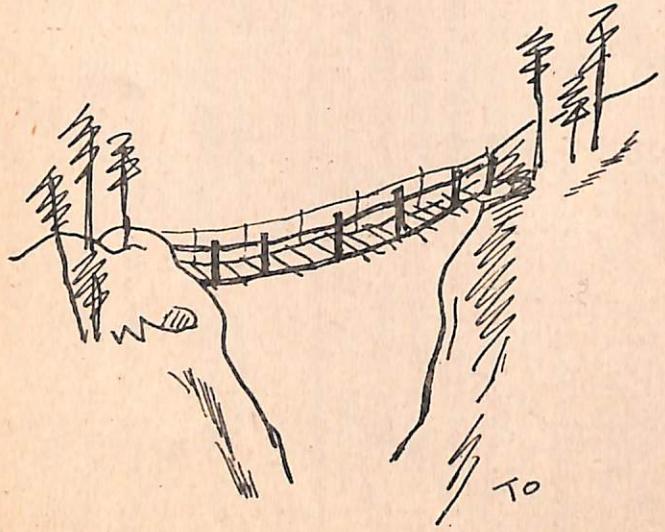
事実をどうする事も出来ない。僕も、そして君もいつの日にこうなるとも限らない運命にあるのだ。

それでは試験地獄の原因は何であろうか。これは学生が多い事。それに一流大学に殺到する事等があげられる。東京工業大学の某助教授（文料系）はこう言つている。「数学上からみれば、日本は高校卒業生に比して大学の数が足りないので試験地獄がおきる。大学の門口をぐんと広げれば簡単だが日本の実情はそれを許さない。ところで学生という階級を維持していくのは国の経済力にかかつている。日本は貧乏国でありながら多くの大学生を養つている。現在の日本の国力からみると大学の。新増設には限度がある。西欧諸国では大学の数が日本と比較して決して多くはないのに日本のような試験地獄はない。これを来たす原因は、やはり学閥があげられる。……（略）」これは問題の核心をついている言葉だと思う。この学閥は東大を指しているのは無論である。これは東大出が非常に優秀だから当然だとも云われる。立派な施設があり、トップレベルの教授のいる大学程、優秀な学生が入学して世の中に出て要職に就いていくのは当然だというわけだ。しかしこれは正当な評価だろうか。東大が過大評価されてはいないだろうか。この不当な過大評価をうけるもとはよくいわれる〃大学の格差〃であり、もう一つは〃社会意識の中の学校差〃であると云われる。簡単に云えば世間的な尊敬、ないし評価である。そしてこの学閥は日本の将来の発展を妨げるガンであるとさえ云われているのである。これはこのままで良いはずはないし、早急に是正されるべきものであろうと思う。

さて我々青年にとつて重要な二つの問題、即ち一つは現代の学生の教養と道徳の低下、一つは現代の学生の実状について（受験地獄の問題）それぞれ僕の思うところを述べたが、ここでこの二つの問題を通して〃我々はどう生きるか〃という事を考えてみたい。教養の低下は教育制度の改革をよび、道徳の低下は道徳教育の実施を叫ばせている。この中で我々はどういう態度をとり、どういう行為をなせば良いのであろう。これは難しい問題で簡単に言える事ではない。そして各人が自分の信ずる道をもつて対するべきであろう。我々学生は前述の某教授の云う如く働かない階級である。この場合の働くという意味は、アルバイトその他の意味ではない事は勿論である。それであるから我々学生は一人立ちしていないし、社会的にも発言権は弱い。特に僕等高校生は身体的にも、精神的にも、社会的にも未完成な人間であり、明日という日の活躍が期待されている現在において、学生の本業を忘れて、いたずらに直接教育反対論と学生運動に没頭するのは好ましくない。やはり現在の努力を未来において結実させるべく、今は学業に運動に真面目に打込むのが本来の姿であろうと思う。〃我々はどう生きるか〃という問題は、元来各人が考えるべきであつて、一人、一人が自分にとつて最善の道を見つけ出して進み行くのが本当である。それこそ"Going my way"である。だから我々はこう生きなければならぬ等という事は絶対にあり得ない。人から押つけられた人生の道であつてはならぬ。我々はこう生きなければならぬという事は無いが、全般としていえる事はある。けれどもそれはあくまでこう在りたいというだけのことであつて、個人の生き方を律するものであつてはならぬ。ただ我々青年全体について、とりわけ言いたい事はクラーク博士が明治初年北海道の農学校現在の（北海道大学）をを離れるに至つて、生徒に残

した"Boys be ambitious!"という言葉で表わされる高遠な理想をもちたいという事である。平凡な言葉であるが真理を含んでいると思う。高遠な理想というのは現実離れした夢をさしているのではなく、それには実行が裏附けられている。少なくとも可能性のあるものでありたい。

青年から理想を奪つて後に何があろう！　人生はいうまでもなく厳しくて時には血も涙もない事もある。よく人生は航海に例えられるが、そこには嵐が待つていようし、或は大渦が口を開いているかも知れない。それでも我々は果敢に船出して行く。人生という航海には際限が無いといわれるが、航海にとつて目的地があるように人生にも目的地はある。人生航海の目的地が、即ち僕の言うところの理想という名の港である。それであるから理想という目的地を見失つた船は、やがて波の間に消えて行く運命にある。何故ならばこの広い大海に行先の無い船は魂の無い人間同様であるからだ。



卒業に際して

在学中の思いで

三年B組　鈴木　澄子

先日某新聞委員から、卒業に際して何か〝在学中の想いでを〟と依頼された。筆を取るに値しない自分はこの御依頼には少なからず面喰つた。然も更に面喰つた事は在学中の想い出、在学中の想い出といくら想をめぐらせても何一つ思い出らしきものは浮びそうもない事である。これには我ながら驚嘆の至りである。自分はこの三年間何を思い何を考え朝に夕に校門をくぐつたのであろうか。一生懸命勉学に励む事が学生に与えられた本来の使命であり、義務でもあるのだ。しかしだからと云つて高校時代に学ぶべきものは単なる勉学のみでは決してないのである。人間完成の途上にある我々若い高校生にとつて、経験し得る総てのものは決して無為なるものにしてはならないのである。例えつまらぬ映画を一本見るにしても、それを深く自身に感知して求めるのでなければ、総ての経験は唯素通りするに過ぎないのである。自分はこの三年間に多くを経験し、多くを学んだ。生徒会を通じ、クラブ活動を通じて団体生活に於ける協調性の重要さをしり、更には人間心理の複雑さをも、—とここ迄書いて来ると自分にも満更思い出もないではない事に気付く。そう二年の時だつた。私の所属していた新発足の写真部には、その部の性質上当時は女子がたつた三人程、それでも男女非常に良く和合して初めてのクラブ活動の真の意義を、ここに発見したかの感を深くした。ところが写真部には暗室がつき物、所詮周囲の者の目は白眼がち、やがて無根のデマが某教師の耳へ—。或る放課後、例の三人であのプンと鼻をつく醋酸の臭気の充満した暗室に閉じ籠り、純白の陰画紙を現像液なる液体に浸すと、徐々にあの神秘なベールを剝いで現われる被写体のシルエットに胸をはずませて…、と瞬間！。ノー・ノックで暗室の扉が開かれ、一瞬にして数時間の労苦は泡沫と帰したのである。生徒を思うが故の偵察であつたには相違はないが、心情を害されたと云うよりも、余りの無念さに涙を落したと云つた方が当つているかも知れない。こんな思い出も、生涯忘れる事の出事ない貴重な経験に違いない。—とここで私の思い出なるものはプツリと途断える。休学と云う憎い運命に遮断されて、楽しかるべき修学旅行すら参加出来なかつた。即ち資料がないのである。自分から総ての希望も喜びも奪い取つてしまつたその悲しい運命を呪つた。そして悲しんだ。しかし私はここに、修学旅行の思い出よりも何よりも貴重なる体験として、あの苦々しい体験を生かすべく努力してみようと思う。特異な思い出をここに回顧してみよう。〝在学中の思い出〟をと云う題意に反して或いはピント外れになるかも知れない。だが甘んじてそれを文章にして見よう。余りにも貴重な体験であつたから…。あの偉大なるブランク、休学と云う経験をもつてしては、在来のあらゆる経験をもつてしても、そんなものは取るに足らない些細なものではなかろうか。然り何んと偉大なる体験だつた事か。無論当時は有益な経験なんぞとは毛頭思つても見なかつた。唯皮肉な運命を呪つた丈だつた。毎日々々、何んの変哲もない天井の節穴を唯慢然と見つめている自分が堪らなかつた。病気なんて貴重な人生を無為にする。最も些らないもの、なかんずく、若い者にとつてはその特権である青春の歓びをさえ、取り上げてしまうかも知れない。学友は今日もあの学び舎で、新しい知識をどんどん吸収して行くのに、自分丈が取り残されてゆく。何故自分丈がこうも不幸なのか。全く堪えられない気持だ。病気と云う大きな障害壁にぶつかつて、総てに絶望し、自暴自棄になつている自分の哀れな姿を発見しては、ハッとする。こんな事では駄目だ。こんな事ではいけない、と幾度となく我と我身に云い聞かせる。しかし病床で敏捷な神経にある自分の脳裏に去来する不安と焦燥の念は、断つ事を知らなかつた。自分は血も涙もない神を呪つた。そして皮肉な運命に泣いた。そして逐次、私の心根の奥深く劣等意識は滲透していつた。——あれから一年と云う歳月が流れた今日、当時あれ程呪つた運命を、今日尚も呪い続けているだろうか？否、呪つては居ない。むしろ幸運だつたとさえ考える。負け惜しみではない。自己弁護でも決してない。そんなものを一切排除した悟りの世界へ何物かが私を導びいて下されたのだ。時の流れだろうか？そうかも知れない。しかしあの運命を誰が幸運な運命として肯定出来ようか。誰も出来ない。確かに自分は不幸だつたのだ。しかしこれを経験として諦らめたらどうだろうか。いや、諦らめなんかではない、喜んで受入れるべきではなかろうか？これも長い人生の一つの経験、厳しい試練として、自分には有為でなくてはならないのだ。私達は一般に日々些細、煩雑な事に追いまくられ、精神的頭の訓練を忘れている。自分の事を省り見るには、病気は災いしないのではなかろうか？「我日ニ我ガ身ヲ三省ス」とは中国の賢人の事、私が如き凡人は、たまたま三省せねばならぬ事を思い出すのが関の山、唯凡人として、若い人間として、悔いない生活を送つているかどうかを想起する丈でも充分と思うが、それすら出来ない。少くとも自分は忘れていたのだ。—退屈なる日々が、何んと偉大なる発見を自分に促したのであろうか。この不思議な空間を透かして見た。前後の高校生活は面白いコントラストを成して、今終りを告げようとしている。あのクラブの想い出も、あの苦しい筈である休学の思い出も、全て快楽に帰結するのは、時の浄化作用のならしむる所であろうか。

高校生活を顧みて

三年A組　池田　洋子

思えば、はやいもので、長いと思つた三ケ年の高校生活も、夢の様に過ぎ去つてしまつた。ふり返つて見ると、三年前の四月、晴れの入学式に、みんなそれぞれ希望に満ちて、わが松原高校に入学したにちがいない。新しい制服。又先生も友達も皆一変して新しくなつたのである。その意気ごみで、私の心も希望にもえていた。しかし、また学校の内容もよくわからず、上級生や先生の指導に従

うのみが多かつた。けれども全く無邪気で素直なものであつた。さてそこで、なんといつても、高校生活三ケ年を通して考えなければならないことは、三年後の自分自身の進路を決定することであつた。進学するにせよ、就職するにせよ、実力がものをいうのである。私達の実力は紙面に表われた結果によつて判断されてしまう場合が、少くない。それには、自分の決定した進路に向つて、着実に歩んで、行かなければならない。実力というものは、単に基礎学力であると私は、おしせまつた今頃になつて、やつと分つた。一、二年の時は、普段の授業さえ、しつかりやつていればよいのである。いや三年間学校の授業を十分に活用すれば、そこに自から、実力がついてくるものではないかと思う。しかしこんなことを言いながら、自分自身十分成し遂げることができなかつた。それだけに後輩の皆様には、後悔のないよう、十分授業を活用して、基礎学力を身につけて思い思いの道に進まれることを、心から願うのである。又一方、私達の在学中には、体育館の建設、校舎の増築と、目下わが松原高校は発展の途上にある。ここに私達卒業生は、記念として半ば永久的な校旗を送り、また歴史も浅いわが母校の発展を、望んでいる。みんなして母校の誇ある伝統を、校旗に印していこうではないか。

以上、思いのままに筆を執つて来たが、結局、高校生活三ケ年の思い出というものは何もなかつたようにも考えられる。だが、追いまくられる試験も今まではつらいつらいと考えていたのに、卒業する今となつてはなつかしい思い出となるばかりなのである。その他数々の行事も二度とない、学生生活の思い出として、私の心に深くしみこんでいる。こうして苦しみ、楽しみを共にして過ごした、高校生活を最後に、社会の一員として、巣立つて行かなければならないと思うと、悲しさやうれしさで胸はいつぱいである。どうか在校生の皆様、わが母校の発展のために今後ますます御活躍下さい。

では皆様の御健闘を、お祈りしています。

明日の風

三年E組　木村　勇

「明日には、明日の風が吹く」、と云う言葉がある。一体今の自分は、どんな状態にあるのかと色々思案した未に、その言葉に気がついた。全く今の気持はそれに当てはまる。

後一月足らずで卒業となる。卒業の前に、大学の入試がある。そして先日担任の先生に、自分は何処の大学に入れますか、と聞いたら、「あなたは近頃ぐんと実力が下つている。何処の大学を受けても危ない」、と云われた。なる程さもあろう。自分はそれだけ勉強しなかつたのだからしようがない、しようがない、どつちみち受からんのだから、しようがない。それでは入試と云う事は、さつぱりとあきらめて、面白い小説でも読んで、気を晴らそう。しかし、大学に入る事が出来ないとすると、自分は、一体どうなるのであろうか。親共を初めとして、もろもろの大人共に、そんな事を聞かれるのであるが、実は、自分も知らんのである。明日には、明日の風

が吹く、自分も多分その如くになるであろう。とにかく、卒業という、一つの出来事が終れば、とにかく自分は又別の異なる状態に置かれる事は、誰が何と云つても、曲げる事の出来ない事実である。曲げる事の出来ない事実である。かくの如く、今自分は断言した。勿論、これは、唯のからいばりかも知れない。しかし、そんな事を云わんでくれとて、親を筆頭として、もろもろの大人共に、嘆かれたとて自分には知つた事では無い。実は甚々愉快な心境でもある。「人間は、あきらめが肝心である」、世のもろもろの大人共も、そんな事を云うではないか。しかるが故に、自分も、きれいさつぱりと、大学の事等、あきらめてみたのである。実は、こんな事を云うのには、それ相当の理由がある。実は、ある大人が自分に、人間は、あきらめが肝心である。との事を、こんこんと悟したのである。確かにそれは、大学をあきらめろと云つたのではなかつた。とは云うものの、自分にはそれより、ずつと大切な事であつたのである。その大切な事とは何であつたか、実は、自分も、長い間、胸の中にだけしまつておいて、誰にも見せんようにしていた程、大切なものであり、又さらけ出すのを恥かしく、思つたものである。と云はば、大体、おわかりの事と思う。そして、それを、胸の中より、やつと切ない思いで取り出したと思つた途端に、もろもろの大人共に、めちやくちやに、壊されてしまつた。それとは、無論ある乙女に対する、切ない思いであつた。かくの如くあけすけに云うのも、それ相当の理由がある。どつちみち、寄つてたかつて、ぶち壊わされた上に、当の相手にも、嫌われてしまつた現在の自分の、さつぱりとした気持にもよる。つまり、もろもろの大人共の自分に、云い聞かせた事は、人間は、あきらめが肝心であるとの格言であつた。自分は、この大人共の行為に、むしように、腹が立つた。だから、それを、大学入試の方にあてはめてやつた。そして、そんな事でくじけた当の相手にも、腹が立つた。そして、そんな事位でくじけるような彼女は、どうせろくな奴ではなかつたのだ。もともとそんなくだらぬ彼女は、相手にとつて、不足である。すてちやえ。しかし、やはり、少々不安である。明日には、一体どんな風が吹くのであろう。自分は大学も受からん。就職もしない。又、彼女に会う事もなかろう。そして、ある特殊な学校に、親共の切なる要請で入る。それは、予備校である。自分に、片一方は、徹底的にあきらめろと云いながら、片一方は絶対にやれ、と云う。何を云うか。こんちくしよう。自分だつて、人間である。そんな事が簡単に出来るものか。その様な泣き事を云うと、大人共には、馬鹿にされる。そして、当の自分は、どうする事も出来ない。まるで海に、溺れるみたいだ。あがいても、ばたついても、どうしようもない。身体はだんだんと沈んでいく。こんちくしよう、こんな事で負けてなるものか。しかし、大人共の声は、又何と、うるさいのだ。うるさい！だまれ！

高校生活をふりかえつて

三年C組　沢村　興平

受験準備の為忙がしく、おもいもよらぬ事であつたが、卒業試験の終つた十一日、三年間の思い出を書きつづつてみた。人生六十年

の一部、三年間は短いが意義ある期間であつた。出来事を断片的に一つ一つ思い出して見ると、やはりかなりあるものだ。それを又、一つ一つ書いていては紙片がつきないので、僕の生徒会の活動を中心にして書いてみようと思う。

生徒会書記という肩書

僕が実際に生徒会に飛び出したのは、一年の後期からであつた。前期の終りに、後期役員の選挙が行われた。我々一Cのクラスから引つぱりだされる様にして、会長に田宮君、副会長に白幡君、書記に僕、会計監査に嶋君と顔をそろえて出馬し、競争率二倍から三倍のせりあいの末、僕と嶋君が当選し、田宮君、白幡君はおしくも次点であつた。僕のそれまでの書記に関する知識たるや、黒板と議事ノートに字を書き込む事だけであつた。しかし、僕の参加した生徒会では、原田君(当時二年生を)中心として、全ての事を全員であたり、全員で解決していた。第一の仕事である予算編成、雑誌の発行、その他多くの雑事、学期末には決算、これら全ては、書記もまじえ全員で行つたのである。これらの中で一番苦心したのは、予算編成であつた。まず我々生徒会員で原案を作つて、常任委会(今の自治委員会)に提出する。この常任委員会の出席者である、常任委員、各実行委員長等は、国会に於ける野党のごとく、我々の苦心して作つた原案をなんとか大きく変えてやろうとし、こまごまと追求して来る。常任委員会で一波乱起した後、クラブ委員会にかける。ここが又、一波乱起る場なのである。特に運動部の委員会では、こつごつした部長が、机にこしかけ(椅子などにおとなしく坐つていない)すごみのかかつた低音でどなるのには、冷汗をかく思いであつた。

規約改正委員

僕が生徒会の役員になる前から、すでに二年生の間には、規約改正への動きがあつた様で、原田君、鈴木君を中心として、僕と田宮君、児玉君を加えて改正の動きが活発となつた。というと聞えがいいが、実をいうと、我々三人は道具にすぎなかつた様である。改正の趣旨は、三権(自治、行政、風紀)分立と、生徒会の職員会からの独立にあつた様だ。しかし、これはなかなか進まず、困難をきわめ、二年生が三年生になると、さらにうやむやになつてしまつた。

その後、久保君を会長とする役員が選出され、再び、田宮君、僕それに一年生を数名加えて、改正問題が取り上げられたが、こん度は、高校生の生徒会の規約として相応しくない前改正規約を却下し、新しく、現行の規約をもととして、改正が進められ、現在の様な規約となつた。

目立つた点は、自治委員会を中心として、その下にある各実行委員会を厳選して、企画委員会を自治委員会に含めた点であつた。総会でもこの点は一番問題となり、活発な質疑応答が行われた。現在、又も改正の声があるそうだが、どのような点が問題となつたのであろうか。形式にとらわれることなく、質実な規約の出来ることを祈る。

風紀委員会

二年の前期、風紀委員長として働いたが、その半年間の一番の仕事は、風紀申し合せ事項の改正であつた。前年あたりから、申し合

せ事項について細い改正は行なわれていたが、風紀委員会がはつきりとした態度をとらず混乱していた為、風紀(特に服装等)が乱れていた。そこで、教師からの要望もあり、生徒の声も高まつていたので、改正への運びとなつた。現在の申し合せ事項である改正申し合せ事項は、前の申し合せ事項に比べ、かなり制限もゆるめられたものである。この申し合せ事項改正の時感じたことは、女子には失礼だが、〝女子は無難が多い〟という事である。この点は、女子に十分心掛けてほしい点である。

クラブ活動

クラブの紹介が入学するとすぐ行なわれた。僕は中学三年の終り頃から、テニスを始めたので、テニス部に入部した。ところが入部して驚いた。部員は七、八十名でコートはたつた一面、これでテニスが出来ますかつて。

そこで又、中学三年間、やつていたバスケットをすることにした。中学時代には、平深君もいて、新宿区代表になつて、都の大会にも出場したことがあり、対戦成績も優秀であつた。又、練習も厳しかつた。ところが松原のバスケット部は、弱いのも弱いし、練習もまことに張り合いのない。怠惰なもので、一年生で口出しをするわけにもいかず、はがゆい思いであつた。僕が入部していた一年半の間の対戦成績は一勝四敗、何をかいわんやだ。これからの後輩の諸君はうんとがんばつて、成績を上げてもらいたいものである。

遠足、修業学旅行の事

ごみごみした銚子、大吠岬(一年春)、山上からの関東平野の眺めのよかつた唐沢山(一年秋)三原山と名物椿にアンコさんの大島(二年春)、自然の形作るすばらしさと、自然を征服する人の力の偉大さ感じた鳩ノ巣、小河内ダム現場(二年秋)、四国、九州、関西をめぐり思い出の数多い七日間の修学旅行(二年終り)、雨で中止になつた三年の春、最後の遠足であつたが、雲と霧雨のため芦ノ湖の美観を見られなかつた箱根(三年秋)など。

勉学の事

年々大学の道が狭くなる現在、三年間の規則正しい怠りのない勉強が、勝を制するのであろうと思われた。

友情の事

信頼のおける友達を、少くとも同性にしろ、異性にしろ、一人もつということが、大切であると思われた。高校生の友情は、中学における以上にさつぱりとした、打てば響くのが良い。私に信頼がおけないのか、本当に信頼のおける友人が出来なかつたことは心残りである。

親密な異性との交際の事

親密なといつても前項とどう異なるのであろう。僕に関する限りでは、前項における友人達が映画を見たり、郊外に出かけたり、お茶を飲みにいつたりといつたことが異性との間に一人対一人の形をとり、友情+恋情=友情+α(アルファー)となつた。これとて試験勉強の為、はかばかしくなかつた。

マリア＝ルース号事件

——明治初期外交史の一断面——

坂本夏男

一

明治五年（一八七二）と云えば、「ジャンギリ頭をたたいてみれば文明開化の音がする。」歌われたように、西洋のものと云えば、進歩を意味し、価値のあるものと考えられ、思想や生活の面で、洋風を積極的に採用しようとする文明開化の風潮が、高まつた頃である。この年の九月には、新橋・横浜間に我が国ではじめて汽車が運転を開始した。

この汽車の運転開始に先立つこと約三ケ月、六月五日のことである。おいおい隆盛におもむきつつあつた横浜港に、南米ペルー国の汽船が入港した。この汽船は、船号をマリヤ＝ルース号と呼び、船長はリツカルド＝ヘレローと云つた。去る五月二十八日、中国のマカオを出帆し、本国へ向け航海の途中、暴風雨にあつて、船体を損傷したので、修理のため横浜に入港したのである。横浜港長が、神奈川県庁に提出した申告書によれば、その乗船客は「清移住民」であり、その人数は二三一名であつた。この二三一名は、表面的には移住民であつたが、その実は、中国の貧民であり、売奴、即ち労働奴隷として、ペルーへ移送されていたのである。

ペルーは、南米インカ帝国を滅ぼして、スペイン人が建てた国である。一八二一年以来、スペインより独立して、共和政治を営んでいた。この国は、アンデス山脈が南北に縦貫しているため、気候、地勢、地味ともに変化が多く、そのため各種の産業が起つたが、太平洋に面する地方では、アンデス山脈に源を発する多くの河川に灌漑の便を得て、甘蔗と棉花の栽培が盛んになり、そのために多くの労働力を必要としていたのである。

マリヤ＝ルース号が入港してから二日目、即ち七日の深夜、一人の中国人が、マリヤ＝ルース号から海中に飛び込み、息も絶え絶えに、近くに錨泊中のイギリス軍艦アイロン＝デユック号に泳ぎつき、救助を求めた。アイロン＝デユック号は、直ちにこれを救助し、加養を与えた上で、翌日、その中国人を、イギリス領事館の手を通じて、神奈川県庁へ送致した。この中国人は、名を木慶と云い、船中の虐待にたえかねて、生死を運にまかせて、脱出して来たのであつた。神奈川県庁では、直ちにマリヤルース号の船長ヘレローを呼び出して、木慶の事につき調査を行い、一応彼を船長に引き渡した。然るに、木慶は、船に戻ると同時に非常な糾問を受け、又、多数の中国人も厳しい拷問を受けたらしく、彼等の苦しみの声が、アイロン＝テユック号まで聞えた程であつた。そこで艦長は前夜のこともあり、直ちに、部下の将校を上陸させて、イギリス代理公使アール＝チー＝ワットソンに、この事を報告せしめた。この報告を受けると、ワットソン公使は、マリヤ＝ルース号に赴き、真相を明確にしようとしたが、船長は、ワットソンの行動を不快とし、頑強に拒絶した。従つて、公使は目的を達することが出来なかつたが、船長と談判の際に、中国人が頭髪を切られたり、或いは、傷つけられて苦しんでいるのを目撃したのである。かくて、公使は、これは重大な人道問題であり、このまま放置すべきでないとして、我が国の外務卿副島種臣に、一書を送り、マリヤ＝ルース号に於ける残虐な取扱いと、清国人の苦難の状況を述べ、この事件につき、断乎たる処置をとるように要望した。又アメリカ合衆国代理公使シー＝オー＝セパルトも、ほとんど時を同じうして、同様な善処方を、副島外務卿に希望している。

二

ここに於いて、副島種臣は、たといこれは條約未済国の船舶内の事件であつても、我が領海内に起つた問題であり、而も非人道的行為はあくまでも糾弾して、我が国の誠意を世界に示さねばならなぬと決心した。然るに、当時の司法卿江藤新平は、條約未済国の船内に起つた外国人間の問題には、何等干渉する権利なしとして、副島の意見に反対した。又神奈川県令陸奥宗光も、廃藩置県後内政的に事多き現在、無用の又無権利の問題にひつかかつて、事を外国と構えることは不得策として、江藤の考えを支持した。かくて、副島がこの問題に手を下すとすれば、陸奥の立場は微妙なものとなる。

ここに於いて、陸奥は、当時地租頭と、神奈川県令を兼任していたので、県令の任は解かれることになり、同県の権令（今の副知事）であつた大江卓が、事に当ることになつた。七月一日ずけ、副島外務卿が大江権令に与えた命令の要旨は次の如くである。只今、横浜港に碇泊しているペルー国のマリヤ＝ルース号で生じた事件は、厳重に糾弾する必要がある。従つて、同船の船長ならびに同船で生じた始末を至急に調査して、その結果を当外務省へ報告せよ、と。この命令に接した大江卓は、特別法廷を神奈川県庁に開き、自ら裁判長となつて取調べを行うこととなつた。大江を助けたものは、山東一郎、林道三郎、米国人ヒールなどであつた。ヒールは神奈川県庁の法律顧問であり、頭脳明敏、この事件の法理的解釈や、関係文書の作製などは、ほとんど彼の意見に基ずいたと云われる。

七月四日、まず船長ヘレローを召喚し、ついで逃亡を企てた木慶を呼出し、取調べを行つた。こえて七日、数名の中国人について取調べたところ、木慶以上の虐待をうけた者があり、逃亡を企てた者も数多くいることが明瞭になり、更に脅迫や強制、又は、甘言等によつて、売奴に陥つた事実も確実になつた。七月十四日には、林道三郎とヒールが、マリヤ＝ルース号に赴き、二、三名の中国人を喚問し、事実の取調べを行つた。この取調べが終了してから、二人は通訳とともに多数の中国人が幽閉されている船倉に行き、「此の船が横浜に碇泊中は、日本政府に於て、諸君を保護する」と言聞かせた所、直ちに政府の扶助を願い出た者が、少なくなかつた。取調べは、これより連日実施された。

船長ヘレローは、かかる措置に対し、マカオ、或いは中国、又は海上にある間、船上でなした船長の行為については、日本の管するところではない、又万国の公法に触れることは少しもない、当今開始された取調べは、正当な裁判と認識する事は出来ない、と強硬な抗弁を申立てて来た。又某国領事館からも、抗議が提出された。ここにおいて、この事件は、国際的色彩を帯びて、多難を予想された。然し、大江権令はその方針と、態度を変えることなく、取調べを進めていつた。かくて、七月二十七日、船長ヘレロー並びに中国船客を呼び出し、判決を与えた。判決の要旨は、この犯罪は、日本の法律をもつて論ずれば、杖一百に当り、或いは、これに代るに、

罪人の階級により一百日の禁錮に当る。但し、船長の申立てや取調べのため、余儀なくさせた滞留や不便を考慮し、船長の罪は免じて出港することを許す。旅客はみな中国人であるから、当管轄中にあつては、他の在留中国人と同様の権利を受けることが出来る、と云うのであつた。

三

中国の清政府は、マリヤ＝ルース号の問題が審理されつつあるとき、特使として陳福勲を派遣した。陳特使は、八月十九日に上海を出発し、二十七日に横浜に到着したので、我が政府は二三〇名の中国売奴を引渡した。但し、総人員二三一名中、少女一名は、船長が強留して、どうしても引渡さなかつた。こうして、売奴等は、晴れて自由の身となり、九月十三日便船を得て、本国に向い横浜港を出帆したのである。一方船長は突然姿を消して、上海に脱走し、続いて副船長も姿を見せなかつた。又乗組員もそれぞれ暇を得て郷里へ帰つていつた。

翌六年六月になると、ペルー国政府は、我が国の処置は不当な越権行為であるとして、海軍大佐オレリヨ＝ジ＝ワイ＝カルシャを特命全権公使として派遣し、我が国の政府に対し、強く弁明を求めた。これに対し、副島外務卿は、外務少丞上野景範をして当らしめた。上野は、我が国の措置は、正義人道に基ずいて行われたもので、万国公法にもとるものでないと論駁して、ゆずらなかつた。ここにおいて、両国合議の上、特別な解決法がとられることとなり、有名な農奴解放令を出したロシア皇帝アレキサンダー二世に、六年六月二十五日付をもつて、この事件の裁決を依頼することとなつた。アレキサンダー二世は、この国際控訴に対し、慎重な考慮を払い、同八年五月二十九日に、日本政府の処置は正当であると、判決を与えた。こうして、約三ケ年にわたるマリヤ＝ルース号事件は道義に対する新興日本の意気と信念を示して幕を閉じたのである。

（昭和三三、二、二〇）

特別寄稿

新高登山記 (三)

教諭　永浜　先義

前号概要

「新高山といっても現在の生徒は誰も知りませんよ。」と高津君に云われた。それで簡単にここで説明しておこう。

太平洋戦争で日本が台湾・朝鮮・樺太南半を失う以前に於ては日本最高の山であった。今日、日本の最高は富士山であるが、富士山を凌ぐこと一八〇米、海抜三九五〇米である。熱帯から温帯、冷帯を経て頂上は寒帯の気候である。

清国人はこれを天山と称し、欧米人はマウントモリソンと呼び、高砂族はサベッハ又はウサベック（ブヌン族）と言い、或はパットンカン又はパトウンコア（ツオウ族）と言った。

明治二十七、八年の日清戦争の結果、下関條約によって台湾が日本の領有となった時、明治天皇によって「新高山」と命名されたのである。最近の地図によると「玉山」となっている。

この記録は昭和十八年の夏休み、台中州教育課主催の新高山登山隊に参加した時のものである。

第一日（七月十二日）

南投街を午前八時三十分に出て集々街に行く。集々街が集合の場所である。十時に集合。

班の編成が行われる。バスで内茅捕の少し手前迄行く。ここから東捕下まで台車（トロッコ）で行く予定だったが数日前に事故があったので歩いて行く事になる。本日の行程は六里十二町。夜の十二時頃温泉のある東捕荘に着く。

第二日（七月十三日）

東捕荘から八通関駐在所まで約四里二十町が今日の行程。海抜一〇〇〇米から二五〇〇米位迄登るのである。このコース最大の

難所「親知らず」は絶壁の中腹に僅かに足を支えるにたる巾の岩道が縫っている。その道も中途で絶えて、手で岩につかまり出っぱった岩の向うに足場を求めて渡らねばならぬ所であった。

第三日（七月十四日）

今日は新高山の頂上を極める日である。午前一時起床。気温は十三度、二時に出発。一時間位歩いた頃だった。大落磐に会ったのは。松明も消えて真暗な闇の中で上から岩が落ちてくる。思わず地面に伏したが大少の岩が「カラカラグワン」と飛んで行くのが感ぜられ生きた心地はなかった。この事故でS氏が負傷されたが医師の居る所へ引き返えすには三日かかる。むしろ背負って頂上をきわめ、山の向う側に出た方が早い。警手（警察官の補助的役目をする高砂族）が交替で背負って行くことになる。頂上で陽の出を迎える予定だったのが思わぬ事故で新高椴松の林で陽の出となる。やがて林も終り「はいびゃくしん」の地帯に出る。更に登るともう岩ばかりで草一本生えていない地帯になる。風が物凄く、体が吹き飛ばされそうになる。岩は粘板岩でザラザラと剝げてしまって手がかりになるものがない。息が苦しくなる。頂上の陸地測量部の三角標柱が見える。さァもう一息。頂上には新高祠という小さな石造りのほこらがある。全員が揃ったのは午前九時。団長の音頭で声の限り「万歳」を叫んだ。頂上の気温八度。十時下山。はいびゃくしん地帯を抜け新高椴松や梅の林を過ぎ、「新高下駐在所」で飯を炊いてもらう。やがて雨になる。岩の横腹に短かい丸太をさし込みその上に板を渡した棧道をすべらないように注意しながら歩く。膝ががくがくして力が入らない。午後五時過ぎ鹿林山荘に着く。今日の行程は六里二十一町。

第四日（七月十五日）

午前八時頃一行は鹿林山荘を出発して下山した。負傷されたS氏の附添として居残った者は六名だった。（小生もそのうちに入る。）居残る者は裏の丘の上まで行って一行を見送った。我々は正午に出発する予定だから、午前中は暇である。山荘のお縁の下は石畳のベランダになっていて遙かに山々を見下すことができる。S氏も別に大したことはないので籐の安楽椅子をベランダに出してそこに寝かせた。

その周りに僕等も椅子を持ち出してきて日向ぼっこしながら熱いお茶をすすっておしゃべりを始めた。（これが台湾の真夏とは一寸思われない。）北の山々を見下した眺めは実にすばらしい。雲が眼下を流れて行く。美しい小鳥が来ては「チッチッ」と鳴く。爽やかな風が吹いてくる。澄み切った空気をせい一杯吸い込む。S氏は時々いかにも痛そうな表情をされる。何と云って慰めてよいかわからない。本当に気の毒であった。女の先生が何回も何回も傷つかれた腕を冷水で湿布していた。

雲が流れてきて山々を蔽った。実に美しい雲海である。羊の毛のようにむくむくとした雲が果てしなく続いていて所々に山の頂が頭を出していて丁度海の中に島が浮んでいるように見える。

少し早目に中食を済ませ正午頃出発することになる。（正午の気温十四度。）

高砂族の青年（警手）がS氏を背負って行くので我々はS氏のリュックサックを交替で持って行く。

鹿の寝屋や望峰角、モリソン台、石山神木、黙禱の崖などの標木が立っていた。石山花畑には躑躅が山一面に植えてあった。花が咲

いたらきれいだろうと思った。路傍にりんどうのうす紅色の花や木苺の朱い実などが目につく。

既に連絡してあったと見えて阿里山警察から高砂族の警手が担架を持って来てくれたのでS氏をそれに乗せる。雲が下から昇って来て小雨になった。（山では毎日午後になると必ず小雨が降った。）

やがて新高口の駐在所に着いたので其処で休んだ。鹿林山荘から此処まで約七粁である。

此処が阿里山登山列車の終点である。午後四時半発の予定の汽車が五時頃やっと来た。これは運材列車でピストンが縦に動くシエー式蒸気機関車だそうだ。（アメリカ製）シリンダーが片側に三つ連立しているのが一寸平地の汽車とは違っている。

阿里山の宿の人がわざわざ迎えに来てくれ色々世話してくれた。

切符は次の児玉駅で買うのだそうだ。暢気なものである。大きな材木が山のように積んであった。宿の人が「今、此の山の下で台湾神社の鳥居にする木を切っていますが直径が六尺もあります。」と説明してくれた。

鼠柏や亜杉、松、栂等の針葉樹林を縫って汽車は走って行く。

児玉駅で宿の人が切符を買って来てくれた。その切符には裏面に「便乗車注意」と題して次のようなことが書いてあった。

1、便乗車ハ当所ノ都合ニヨリ人員ヲ制限スルコトアルベシ
2、便乗中生ジタル運転其ノ他ノ事故ニ基因スル一切ノ損害ニ対シテハ当所ハ其責ニ任セズ
（心細き次第である。）
3、略
4、事業上ノ都合ニヨリ途中ニ於テ運転ヲ中止シ又下車ヲ求ムルコトアルベシ

と。

此の鉄道は材木運搬が目的であるから人間は二の次であるのは仕方がない。

児玉駅で木材積込のため十五分間停車した。これも「便乗車注意」の第四項によってやむを得ない。

その間にI氏（生物の先生）は下車して美しい花を一枝とって来て虫眼鏡で見ておられた。

「面白いですよ。」と言って僕にその枝を渡された。それはヂキタリスの花袋の中で蜂が熱心に花粉を足につけているところだった。枝は次々と他の人に渡された。

「一生懸命やってますね。此処へ持って来ているのにも気付かずに。」

「朝顔になど蜂がはいったら、それこそ夕方になって花がしぼんで口を閉じて帰れなくなってもまだ気づかずにいることもありますよ。」

と話して下さった。そして又

「此の虫眼鏡は二十倍ですが私は常にこれだけは持っていますよ。とに角私の世界はこれを持っていることによって人の見ている世界より二十倍広いわけですからね。愉快ですよ。」

と言われた。なる程楽しむ部面が二十倍に拡がるわけだ。

此度の登山では絵を描く人、植物採集をする人、鉱物を拾う人、スタンプを蒐集する人等色んな人があって夫々自分の楽しむ部面を持っている人が多かった。（戦時中だったので防諜上写真機は持って行ってはいけない事になっていた。）

ただ漫然と旅行するより、何か目的を持って旅行するとどれだけ面白く又印象深く有意義であろうかと思った。（僕は寒暖計を持って行ったが標高と気温の変化の関係を見てゆくのも面白かった。）

蝦松にきりも（寄生苔）が長く垂れ下っているのが汽車の窓から見える。

「あのきりもは冷帯性のものですか？」と植物の先生に尋ねると

「いいえそうではありません。深山幽谷や霧の深い海岸地方にもあります。小笠原諸島の海岸地方の木にもよく寄生していましてね。面白い話がありますよ。」

と話題の豊富なI氏が話し出される。

「偉い大官連中が小笠原諸島に視察に行って木にあのきりもが寄生しているのを見て海藻と間違えて〝小笠原は海が荒れると島を一呑みにしてしまうらしい。木の枝に海藻が一ぱいひっかかっている。〟と言って小笠原には何の設備も施さなかったのでそのため非常に開発が遅れたそうです。」

と。

阿里山駅に着いたのは午後六時頃だったろう。駅前には団長外数人の団員及び宿の人が迎えに来ておられた。S氏には団長が附添われて直ぐ医者に行かれた。我々は宿に行く。風呂に入ってやっと寛ぐ。

陽が西空の雲間に隠れては現われ、現われては又隠れて沈んでゆくのがとても美しかった。紅に黄金に燃ゆる雲が静かに流れる。いつのまにかそれが紫色に染まり灰色に変わりだんだん色はあせてゆく。（台湾も中央標準時を使っていたので東経一三五度の明石と東経一二〇度の台湾とでは実際には一時間違う。一四〇度の東京とは一時間二十分日没が遅いわけである。）

A氏はパレットの上で色を混ぜ合わせてはスケッチブックの上に筆を走らせておられた。

医者から帰って来られたS氏は別に大したこともないというので皆安心した。

今日は鳥の剝焼（スキヤキ）に舌つづみを打ち久し振りに微酔してぐっすり寝こんだ。

× × ×

第五日（七月十六日）

身支度を整えて阿里山駅に着く。宿の人が四、五人送りに来てくれる。土産に名物の蕗（フキ）を貰って汽車に乗り込む。まもなく動き出す。もう今日は温帯圏（此処は海抜二三〇〇米）から一気に熱帯地方へ帰るのだ。

神木駅に着く。昔の小学校の国語の教科書に出ていたあの神木である。傍の標木に、

「樹種　紅桧。周囲　一八米八。高サ　四五米四。樹齢　三、〇〇〇年。」

と記されてある。

先ず仰ぎ見て其の巨大さに驚くとともに自然の偉大さに威圧される。幹には注連縄（シメ）がめぐらされている。

尚、線路の下方に第二神木（又は次郎木）と云われる巨木があって木の内部は洞になっている。洞穴の中に子供なら一〇〇人は入れる程だということであった。

スイッチバックをして下り始める。二万平駅からは塔山のあの切立った断崖がよく見える。小雨がぽつぽつ降り出す。窓ガラスが曇

って外の景色もけぶって見える。遙か山の下方に高砂族の部落が見える。更に下方に薄緑色の狭い平地が見えるのは水田であろうか。平遮那駅に着く。此処までが温帯圏になる。トンネルの多いことには全く弱る。窓を閉めてくれない人がいるので煙が車内に侵入してきて我々を困らせる。

まもなく十字路駅に着く。雨に濡れながら黄色い月見草が一ぱい咲いている。内地の川原の土手を思い出してなつかしい。その月見草の中に白い標木が立っている。

「天然記念物せんざんこう」

と書いてある。

水車寮附近には広葉杉、内地杉の造林が行われていた。まもなく桂竹、猛宗竹が篠々として車窓を飾るかと思うと交力坪に着く。此の附近は全てが竹の林である。竹の柱に竹の屋根の家も四、五軒見える。何時のまにか雨は止んでいる。

独立山にかかる。此処は有名なスパイラル線である。下の方にある樟脳寮駅を四回俯瞰することが出来る。汽車はぐるぐる廻って下りて行く。地図上には鉄道の線路がアラビヤ数字の「8」の字の如く記されてある。西方遙かに嘉義平野を一望の裡に収めて汽車は下って行く。樟脳寮あたりから下は愈々熱帯圏でチークが造林されている。また直径三〇糎位であるがいつか此の木が船材として使われることだろう。

丘に芭蕉が植えてあるのを見ると愈々下界に下ってきたなと云う感がする。想思樹の林の中を走る。甘蔗畑がある。水田が続く。水牛が呑気そうに田を耕している。その背中に白鷺が戯れる。土角（泥を四角に打ち固め天日で乾燥させたもの。いわば焼いてない煉瓦である。）で造った本島人の部落が見える。檳榔樹や木瓜の木があちこちに青空につっ立っている。もう全てが熱帯の眺めである。

湾橋駅の少し手前で右の窓から見える山麓の部落は義人呉鳳が生長した地だそうだ。

一時間余延着して午後三時半頃嘉義駅に着いた。重い足を引きづって駅前に整列した。此処で団長より

「とに角無事に意義深き新高登山の錬成を終えて諸君も大いに得る所があったであろう。」

と挨拶があり団員総代の感謝の辞があって解団の式を終った。

団員は此度始めて会った人々ではあったが同じ目標新高山に登るということで恰も百年の知己の如くお互に助け合い、励まし合い僅かのものでも分ち合って実になごやかな雰囲気の中に予定の日程を過したことは真に愉快なことであった。

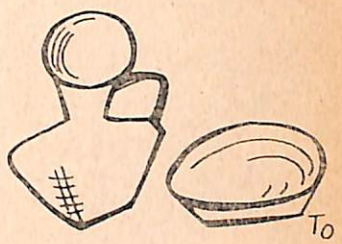
小生は今晩は関子嶺温泉に泊り、明日呉鳳廟を見学して帰るつもりである。

（昭和十八年七月二十四日、枕頭山の麓にて）

創作

夏休みの日記帳から

二年C組　高津　龍二



脳味噌を一発ガーンとなぐられた夢を見て、僕はガバット跳ね起きた。何かしら不吉な胸騒ぎがした。ある一つの不安を頭一杯に抱きながら、足早に玄関先へ出た。そこで、僕は二、三度力一杯眼をこすつて見た。しかしそれでも、まだ到底自分の眼を信じる事が出来なかつた。無いのだ。当然そこに置いてなくてはならない筈の自転車が忽然として消えてしまつているのだ。瞬間、冷水をブッかけられた様な恐怖に似た観念が頭の中、いや、全身におおいかぶさつてきた。（ああ、盗まれちやつたんだ。どうしよう……。）不思議な事にその時の僕の頭の中には、失くなつた自転車を惜しむ気持等は微塵もなく、ただ常日頃から、僕のだらしなさをこつぴどく叱責していた母や姉の嘲笑する顔だけが一ぱいに広がつていた。

母と姉と僕との三人暮しの我家では、その日丁度、母と姉とが出掛けてしまつていた。その上、留守番の僕は軽い赤痢を患つていて、いても居なくても同じ様な状態だつた。犯行が行われたのは僕が居眠りをしていた六時頃から八時頃までの間である。よく考えて見ると軒下に置き去りにしておいた自転車には鍵はおろか、スタンドさえもかけなかつた。これではまつたく「どうぞ、お持ち下さい。」と云わんばかりの格好である。

何はともあれ、警察にだけは届けなくては、と思つたので慌てて近所の小母さんに留守を頼んで一一〇番へ電話をかけに行つた。警察からはすぐ調べの人が来て、長い間、あれこれと調べ、そして帰つた。警察の人が帰つてしまうと僕は又もや一人ぼつちになつた。留守を守り切れなかつた自責感、日頃の怠けぐせを暴露された口惜しさ、深夜の静けさと闇、これらは三日間の絶食でいい加減参つている僕の脳噌味を容赦なく痛めつけた。余り情なくなつたので家中の電燈をみんな点けたり、ラジオのボリュームを最大にしてジャズをかけたりしてみたが、神経は増々昂ぶるばかりだ。そこで、今度は眠つてしまおうと思つて布団を引つかぶつて見たが、どうして、そう簡単に眠れる筈のものではない。仕方がないので〝エーイ、どうともなれ！〟とばかりに不貞腐れて畳の上にゴロりと仰向けになつて、天井とにらめつこをし始めたら、途端に、「ガラガラ」と勢いよく玄関の戸のあく音がして母と姉が帰つて来た。

「ただいま。」母の方はいつに変わらぬ声だ。

「ただいま、おや？自転車どうしたの？。」

姉には早くも感づかれてしまつたらしい。こうなればもうじたばたしても始まるまい。僕は秘かに覚悟を決めた。

「盗られちやつた」

「ホンホントウ?!」これは姉も母もまつたく同時であつた。

「うん。」それでも母と姉は、しばらくは信じられないといつた顔付であつた。が、しかし、やがて、それがどうしても信じなくては仕方のない事実だという事が分つてきはじめた時、二人の顔は次第に、悲哀に、いや検悪に、いやいやその両方を混ぜこねた様に変化していつた。僕は背筋に冷たいものを感じながら、研ぎすまされた氷の刃を待つた。

「大体あんたがダラシガナイからよ」

「毎日の様にしまいなさいつて言つているのにチットモ言う事聞かないから罰が当つたんだわ。」……怠け者……少し頭がおかしいんじあない？……他人の言う事を絶対に真而目に聞かないんだから……大体此頃生意気よ……。およそこの様な意味の愚知とも。説教ともつかない文句を、よくもこんなに探したものだと思いたくなる程、次から、次へと僕の頭上に叩きつけた。そんな説教を、僕は嗅ア天下の妻を持つた、哀れな〝リップ・ヴァン・ウインクル〟の様にただ肩をおとして、時たま頭を上下に運動させて聞いているほかはなかつた。

ようやくの事で説教から解放されて二階の自分の部室に戻つた時は、もう二時過ぎだつた。僕は直ぐに布図の中にもぐり込んだが、こんな日は眠ろうにも眠れないに決つている。僕は至極くアッサリ眠る事を断念した。案の定眼は冴え、頭の中ではいろいろな考えが堂々めぐりを続ける。（……自軽車の事はまあ仕方ないにしても、この調子じあ、又明日も今みたいにあの説教を聞かされそうだ……いや、それどころじあない。あの説教はまだ当分の間は続くだろう……。いやいや、若しかすると向う一ケ年位は続くかもしれないぞ……。いやだなあ、ああ、何とかしてあの説教を聞かされないですむ方法はないだろうか……。まつたく、まるつ切り僕一人が悪いんだものあんな事を言われると穴があつたら入りたくなつちまうよ……。）その時、僕の脳裏にさつと一つの考えが走つた。それというのは、いかにも僕らしい突拍子もない、馬鹿げた思い付きであつた。（家出……。）（そうだ家出をしよう。いかにも自転車を盗まれた事を苦にして飛び出した様な風をして……。そうすりや、お母さんも、姉さんも、目茶苦茶に心配するに違いない。二日か三日、多摩川か登戸の山の中でもうろついてから、夜中にわざと交番の前を通ろう、そうすればきつと職務質問を受けるだろう……。それで身許が分ればいやでも家へ連れ帰つて呉れよう……。そうすれば、もう誰も二度とあの自転車の事で僕を責めつけたりはしないだろう……。よし、これだ、こいつをやらう……。）何かを考えだしたら、例え、それがどんな事であろうとやつてみなくては気の済まないのが僕の性分である。それから約一時間、僕は自分の家出について、じつくり、且つ綿密に考えをめぐらせた。その結果さらにそれから二時間程後、即わち午前五時キッカりに、僕はボストンバックにレインコートと、ジャンパーと有り合せの金五百円余と、それから愛用の竹のたて笛とを持つて家を飛び出した。その時の置手紙を紹介しよう。「お説教が身にしみすぎて、自分が情なく悲しくなつてしまいました。馬鹿息子の事なんか心配しないで下さい。

2

家出中の行状については余り書きたくない。何故なら別に取りたてて書く程の事はなかつたし、大体、生活自体が余りに平凡だつた。要するに昼間一杯は多摩川で泳いで精一杯身体を疲れさせておいて、四時半から九時までは山の中でぐつすり眠る。そして、九時

からは山の中や川つぶちをメクラ滅法に歩き回わり夜のあけるのを待つ……。これを二回くり返しただけである。何故それ以上繰り返さなかつたのかというと、それには余りに家が恋しくなりすぎたからだ。夜、それも、二時頃、誰も居ない川つぺりを歩きながら家の事など考えていると、まるで、五つか、六つの子供えつたかのにか如くに無性に家庭が恋しくなつてくる。若しこれがキャンプかなんかだつたら一ケ月だつて平チャラなのに……と思うと、何故か自分のやつている事が、とてつもなく悪い事の様に思われてくるのだつた。さて、痛快だつたのは、僕がパトロール中のお巡りさんに職務質問を受けてから、家へ連れ戻されるまでの事である。その時の事を少し書こう。

家を飛びだしてから二晩目の十一時頃、僕はかねてよりの計画通り、小田急線の喜多見駅のあたりをウロウロしていた。すると、まるで約束をかわしておいた様に、ポックリとお巡りさんに出喰わした。巡査は薄よごれた風体の僕が、ボストンバックを片手に、うろうろと町の中を歩いているのを見つけるとすぐさま警戒の態度をとり、いろいろと訊問したが僕が頑強に黙秘権を行使しつづけたので、まもなく交番に連行した。そこでも又、四、五人のお巡りさんから散々、驚かされたり、すかされたりしたが僕はあくまで口を閉しつづけた。そこで到頭、身体検査と相成つた。勿論、全然抵抗しなかつたし、妙な穏し立てもしなかつたので、至極簡単に僕の身体からは、わづかな金と、身分証明書が検出された。こんな事になる事位万々承知の上での行動なのだから、学校の身分証明書はチャント抜いておいた。だから、当然、此の時定期入れの中から出てさたのは、それとは別なもの、即わち、「此の者は本署の青少年保護育成運動の一環である、北沢柔道会の副会長である事を証明する」北沢警察署々長……。と書かれた代物である。これは、僕が二年近くも近所の北沢警察署に柔道の稽古に通つていた関係で署長さんから特別に貰つたものである。この身分証明書を見ると交番のお巡りさん達は一斉に疑いをといて、「なんだそんならそうと早く云えばいいのに……。しかし君、一体どうしたんだい。」等と親しげに話しかけてきた。そこで、僕もようやく、ボソボソといろいろな事を話しだした。「何故、黙つていたんだね？。」と聞かれたので、「どうせ身分証明書で身許は分つてしまうのだから、うんと疑われた方が早く家へ帰えれると思つたんです。」と答えたら、皆んな交番が引つくり返える程大きな声で笑つた。そんなわけで、その晩はもう遅くなつてしまつたので交番で泊めて貰い、翌日早々に、もうすつかり仲良くなつてしまつたお巡りさんに連れられて家へ帰つた。こうして、僕は家を飛び出して三日目に無事帰宅した。余程心配しているだろうと思つていたのに、家では二人共案外涼しい顔をしていた、しかし、それが、無理にこしらえた体制であるという事は僕がそれ以来一度も自転車の話を母達から聞かされないという事実によつても容易に推測されるのである。

× × × × × × ×

これは昨年の夏休の出来事を日記帳をたよりにまとめたものである。失くなつた自転車は今の処まだでてくる様子はない。しかしもう今となつては、その事で母達から、とやかく言われる心配はないのだから最早全く苦にはならない。僕は自転車を失つた代わりに生涯忘れられない貴重な思い出を作つたわけである。〝物は金で買える。しかし、思い出は買えない。〟——僕の作つた金言である。

鳥さし

二年E組　島崎　麻子

「お祖父様は勘当されたのですつてね。」私は柔和な祖父の写真を見ながら、そう咳やいた。私がそれを知つたのは正月の事だつた。

会津の奥川の村は、幾重にも山に囲まれたすりばちの底のような寒村である。山は一面に雪をいただいて、その白い衣の青や紫の影のひだによつて、遠近を示していた。そのすりばちの底の一角に、黒いびようを打つた屋根門と、石垣を五尺程の細い堀のめぐつているいかめしい豪族屋敷……正月の三日、私はこの家の玄関に立つていた。ごつごつした構えからは強い因習の匂いが漂よつていた。鎧びつの上に坐つている今にもガチャガチャと動き出しそうな、鎧甲の前を通つて、陰気な息苦しいような、何とも云えない圧迫を感じながら、中の間の文机の前に頭を下げた。「御気嫌よろしう。」「——ふむ。——」何の意味か分らなかつたが髪におおわれた顔はこう云つただけで、ジロリと私を観察した。本家の人とはこうも威張るものかと、苦々しげなその様子と、隣り村の叔父一家の人間味溢れた姿に明らかなずれを見出して狼狽した。

私はこの家には初めて来たのであるが、どういうものか、古跡だの、由諸あるものにびどく憧がれる性質で、例えば、我世田谷の郷土史を夢中になつて読んだり、家の前が鎌倉街道であつたのを知つて喜んだり、代官屋敷へ再三出かけては、白洲にその昔を思いやつたりするのが、この上なく好きなのである。そんなわけで、小津凪八ケ村を治めていた、祖父の生家であるこの古い屋敷に来てみたいと思い、何や如やと、色々な想像をめぐらし、大きな期待をよせて来たのであるが、今この家の空気にひたつては何も言う気がしなくなつた。が、その子供はどんなかと、茶の間に少し図々しく入つていた。祖父様の家だからよいだろうと思つて。しかしそこで私のあまり観迎されない理由を知らされた。

炉辺に十九位のあまり容姿端麗でもない少女が私を迎えた。子供同志、ということから、私のおしやべりの舌が飜がえり始めた。

「このお家とても立派ね。驚きました。」とまずほめると、「この家は結城七郎の血続きでね。…」この事は母から聞かされていたが、彼女はむりな東京弁を使つて、それでも、とうとうと説明してくれた。そのうち段々と私は自分が、軽べつされているらしいのに気付いた。どうやら私が、この家の敷居をまたぐのも、恐れ多いらしい。しやくにさわつたので、思わず「今は家柄や家名を振回しても、通用しないわよ。」と叩きつけてしまつた。相手も本来のズーズー弁に戻つて浴びせ返した。

「やつぱり鳥さしの孫は鳥さしだなし！」

「鳥さし？」私はその言葉が分らなくて、尋ねたが、教えてもらえないまま、家の中を廻り歩いただけで、荒海家第一回訪門は、面白くない始終となつた。重苦しい門を出ると、口惜しい気持のまま、がむしやらに摺鉢の斜面を登つていつた。そして又、鳥さしという言葉が私の心の中を、だんだん支配していつた。

× × ×

「香四郎。荒海の息子たる者が、むゝ、即刻勘当だ！。」香四郎

は眉毛を逆立てた父、荒海藤吾に、勘当を受けた。所持品は細竹一本。その頃は冬の仕事の出来ない間、何の楽しみもない村の若者達は村芝居をしたり、踊ったりすることが、唯一の慰めであつた。その中でも鳥さしというのが、人気を集めていた。私の祖父の香四郎は、当時十八才、穏やかな性質で、格式を嫌つて、村人達と交わりたがり、その鳥さしもこつそりと習つた。そして上達して皆の前で踊ることになつた。「お館様の所の四郎様がおどるのたとう。」大勢の村人達の前で、舞台では、着物をはしよつて、細竹を、真直に持つて……、

〝さあ見さいな　見っさいな
　鳥さした〟見っさいな
　一羽の鳥の云うことにや……

と祖父は身振り手振りも鮮やかに、踊りまくつていた。ところが噂を聞いて、飛込んで来た父に、即座に勘当されてしまつたのである。明治十三年二月、まだまだ生徒関係の意識が脱けきらない時分の事だつた。

×　×　×

「鳥さしの孫というのは、つまり勘当息子の孫だ。」叔父にこの話を聞いて、私は考えこんでしまつた。何も縁を切るとまで云わなくてもよいではないか。体裁ばかり気にして、昔の人は人間生活の本当の味なんて、知らないのだ。拘束を受けながら、古い考えや、しきたりから脱皮しようと努力し続けた祖父は偉いなとしみじみと思つて、応援の拍手をおくりたくなつた。叔父の家で手足を伸しながら……。

その夜七十に手の届いた叔父を中心に、家族と近所の若い人達が十人程、大きな車座になって話し合っていた。この広瀬村は婦人会や青年会が活発な活動をしていて、この機関を通じて、村中の親睦を深めているらしい。農作物の向上や作業の改良をはかって、表彰された従兄は、農業に於ける指導者として、モートルの使用について話し、それから話は「村の民主化」について変っていった。そこで私は昼間のあの苦い経験を語ったのであるが、あの奥川の娘を思うと再び考えた。

「あの人は、この人達のように明るく伸々としていなかった。又、自分の意見を素直に、はっきりと主張も出来ないにちがいない。思えば可哀そうだ。古い因習に押えられ、自分の殻に閉じこもっているので、ああした態度になってしまうのだ。あの人がこの仲間入りが出来たなら」と。私はそんな気持で、鳥さしの子であり、孫である叔父一家の人々の顔を見た。いろりの火が勢いよく燃え、皆の影が大きくゆらめく。赤々と燃えるその炎は、この村人たちの生活への情熱の炎であるように思えた。

或る事

二年A組　吉川　幸男

その青年は、いきなり「ガーン」と頭を、打たれたような気がした。「いったい、こんな世の中があろうか。自分の要求をすこしも受け入れはしない。いや、それどころか、自分を、のけものにしよ

うとしているのだ。」その青年は、昨日の就職試験発表を、知って一瞬そんな気がした。その日から、繰り返し叫んだ。「俺は、頭が悪いのか!!……?あんな試験……。俺は、どんな頭の構造なのか!!……。」青年の心の中で嵐が吹き始めた。青年は、その就職試験外にもはや目を付けなかった。もうどうかしていたのかもしれない。いや、確かに青年の心には〝狂〟という文字が該当した。青年は頭が悪いのでも、なんでもなかった。青年の努力が一歩、それにおくれたに過ぎなかったのだ。にもかかわらず青年は、自己を疑い、常人から見れば、ほんとに、取るにも足りない、そんな事によって、その心を乱してしまったのである。その青年は確かに努力家と名の付く者であった。青年として見れば、あの、目も凍るかと思われる日にも、そして、疲れたガラスから吹き込む風が、下着の裏迄、冷たくする日にも、机に向っていた頃を思い出したとすれば、自己の力に対する疑問、更に、混乱は、常道であつたのかもしれない。しかし、だからと言つて、常人から遠ざかるとなるには、余りにも、弱すぎた。その青年に考える余裕はなかつたのだろうか?一度や二度で気を落す。……あまりにもそれはすてばちであつた。

「俺は、貿易会社に勤める。母さんや妹を、あの薄暗い六〇ショクの電燈から一歩でも離してやりたいんだ。」以前その青年は、そう言つた事がある。その時から、焦せる気持、汚れた綿入れを着た母の姿が、六〇ショクの電燈の下で、納豆の袋貼りをしている妹の姿が、青年の背に、頭に覆いかぶさつていた。

「母さん!!大丈夫だ。今にやる。母さんに、立派な羽織買つてやる。……合格するさ。」「そうかい。……お前のその気持が、母さんには一番だ。」青年の母は、それが真の気持であつた。「母さんはいい。お前達二人は、成功しておくれよ。これで一生終つちやだめだ。」しかし、その母もそう言つた事があつた。「じや、行つて来ます。」……その結果が不合格であつた。家を出る時の母の顔、ほほもこけ、髪も乱れ、ひびの入つた手、そしてその後の古い御膳が目に浮んだ。青年は、過去をふり返つて見た。うす暗い家と、父の死と、「家賃さえ払わない。」と近所中触回つた家主——父の妹しか浮んで来なかつた。青年は、今居るコンクリート、北風の這う、冷えきつたコンクリートの橋を、ゆつくりと踵から踏んで歩いた。月が妙に青い光をはなつていた。「ワオッ——〜〜」遠吠えがその光を横切つた。「かあさ——あん。……」青年は、躊躇などというものなしに大声をあげた。

「ワァ——ンッ」と町角に当つてそれは、跳返つた。人通りは少くなつていたが、それでもやはり、やに取りすましたような横目で見る者が居た。青年の足は、急に速くなつた。「カツカツカツ……」靴音が風に舞つて、月迄も響いた。青年は、いつまでも、何処迄も走り続けた。やがて、その夜の十二時過ぎに、松と杉の植えてある交番で、年を取りかけた警察官に呼び止められた。青年は、色々と聞かれた揚句そこで一夜を過した。夢が青年を取囲んだ。高い天国だつた。白い雲がボーッと、一面にかかつている。やがて夜明け。馬の群が走つて来る。……やつ。人だ。「あ! 俺を呼んでるんだ。おーい、なんだよーお」…やつぱり馬じやないか。「俺を呼んだんじやないのかな?」馬の後にも、なにやかや、続いた。わけもわからぬ、そんな夢であつた。ほんとうに夜が明けた。

「俺の家より、ずつと暖い所だ。」そう考える事が、青年にはまだ

出来た。八時頃に、青年の母は、その青年が、もはや、常人でない事を知らされた。知らせに来た一見、病院の助手と思われる若い、小さな男は、「お宅の息子さんは、入院されてはいかがです？今、ウチの方に警察から回って来たんですがね。」とぶつきらぼうに言つてのけた。いかにも、低いガタガタの戸を軽度したというに価する口つきであつた。「あの……なんでしようか？」男の言葉の暗示するものを、汲み取りながら、自分の言葉の次ぎ目が見あたらず、青年の母はそう繰り返した。男は、何度言わせるのだ。という目付で「お宅の息子さんは、狂つてるんですよ。」といつた。母は、声も出さず男の顔を見た。「とにかく一諸に来ていただきますかな」青年の母はすつかりとまどつて、古い緒の色褪せた下駄をひつ掛けて、男の後に続いた。車が待つていた。「たいした事あないですよ。なにか大きなショックでも受けたんです。内気なんですね？……性質が。」男は、先生の言つた言葉をそつくりそのまま告げた。「……」青年の母は、車が動き出してから、やつと落着きを取戻し始めた。その日から、「スーッ」と涙が筋を型どつた。男はそれを無視して、腕組みをした。家に残された青年の妹は、納豆の袋貼りを黙つて続けていた。

その車はいきなり止つた。「グワンッ」と戸が締められると、車庫へと急いだ。大きな門だけが古い、窓に格子の入つた病院であつた。入口のすぐ横の室に院長と警察官が並んでいた。青年の母は腰を低くして、院長の指す椅子に落着いた。さき程の男は、まつたく姿を見せなかつた。「息子さん、大学生ですね？」院長は、そう切り出すと、滑らかに話を展開させた。警察官は、たえず問答にうなづき、感心の態を示した。「……で此処にとどまつて、様子を見た方が良いと思うのですがね。いや、そうしなければならないと思いますよ。」最後に院長は、そう結んだ。「……」「どうでしよう。私の考えに不合理な点でも？」「……あの……お金が……」やつと、それだけ言うと、青年の母は下を向いた。「いやいや、とんでもない。私は、そんなつもりで言つたのじゃない。息子さんはまだ若い。有望です。様子を見てそれからです。きつと回復します。その時には、息子さんも働くでしよう。そう……静かな仕事が良いでしようね。」院長は、その下駄や、着物や態度から、およそその家庭の状態を判断して、ゆつくりそう言つた。「お金を見るより、若い人達が働く姿を見る方が、私には、遙かに楽しいですよ。……私はそう思いますがね。」「……」

青年は母に会つた。「母さん。俺、気が変なんだ。……近寄つちやだめだ。」青年は、いきなりそれだけ言うと、あとは、口の中でブツブツ何事かを繰返していた。

「お前!!……」母は、遠くに呼びかける様に言つた。「母さんは帰るよ。……お前の夢も消えたんだね―。母さんは帰るよ。」

青年の母は、一時間かかつてあの、暗い家に帰りついた。その青年は、三人と共に、その室で暮した。そこは、比較的軽い病人を入れる室であつた。だから、一番奥にある、囚人の檻のような鍵も、鉄格子も、廊下側にはなかつた。その一人は、なにかと、ゲラゲラ笑つた。他の二人は、ヒソヒソと話をしていた。青年は一日中そこに寝ていた。朝、昼、晩と来る、そこの受持の医師は、四人を一人一人眺め、なにやら書いて出て行く。青年は、退屈になつて来た。そこに来てからもう、一週間も立つていたのである。しかし、その医

師は、規則正しく、朝・昼・晩と来た。「本を下さい。……俺は勉強するんだ。」青年が言うと、例の二人は、真剣な顔付で話し始めた。翌日になると、青年の元に、使つた事のある本が届けられた。開くとまず、花の拡大写真の載つている、生物の本であつた。青年は、毎日それを見た。そればかりを見ていた。なにかを思い出そうとした。何かを考えようとした。室の空気が青年を、八方から圧して、ただそれを目の前にしているだけのようであつた。翌日も、その翌日も青年はその花を見ていた。自分でも、何をしているのか、全くわからなくなつてしまうようだつた。深い溝に片足を奪われているような気がした。青年は苦しんだ。青年は、ますます考えた。そして、その花を見た。無言で……遂に青年は、その写真をメチャメチャに破りとり、本を床に思いきりたたきつけた。翌日医師は、新しい本を手にしていた。〝詩を書いた〟本であつた。一冊のノートと、鉛筆も同時に与えられた。青年は詩を読んだ。遠い世界の或るものが、青年の心を沈着へと導いた。青年は、自ら書き始めた。

風が、ビョウと耳をかすめる。
何処へ行こうというのか。
この限られた狭い中で……。
なにを、いつたいそう騒ぐのだ。

風が、ビュウと電線を鳴らす。
何をしようというのか。
自分の力が分つていながら……。
どうして、いつたいそう威張るのだ。

ノートの一頁にはそう書かれた。

青年が、それを書いた時だけは、ほんとうに、常人と変りがなかつた。青年の母は、息子を大学へやつたカイがないなどと思つた事もなかつた。

「ひとりしずかの花咲けり」

三年E組　木村　拓郎

「……君は、僕の話を信用しませんね。だが、僕も、君が僕の話の総てを理解出来ない以上に、人間が宇宙間で唯一の考える事の出来る存在だなんて全く解せません。人間の持つ感情が、道具が、火が、そんなに素晴しく、又高尚なものなのでしようか。それ等は単に、人間という一動物の、一種族の、一家族の、いや一個人の繁栄の為の手段にすぎないじやないですか。そして、それは、他の動物同様の単なる動物的本能に尽きるのじやないですか。すべては、相対において存在し得るのです。無限に対し有限、善に対し悪、そして、完全な肉体と不完全なスピリット(心霊)による人間に対して、不完全な肉体と完全スピリットを有する反人間が存在するのは当然の事です。いや、それは真実でした。何故ならば、僕は彼女に会いましたから……」。こう語るKの顔は、月光に一層青白く無気味であつた。

或る夏私は、今考えると実に馬鹿〳〵しく思われる事に悩み、そ

の傷心をいやす為に、奥秩父の緑の中を一人徘徊した事があつた。八月二日の夕刻、武州雲取の無人小屋に辿り着き、窓辺のわずかな光の中で手帖にこう記していた。

…全く異常だ！　フタリシズカの花を夏山で見るなんて……

その時人の気配を感じた私は、その小屋唯一の装飾品である壁掛け鏡をとおして戸口を見た。そこには、ひどく顔色が悪く病的な奴が居たが、それがKであつた。登山リュックの他に手に鉱物採集箱や採集袋、ハンマー等を重そうにさげた彼は、地質、鉱物学に関する研究調査の為、秩父古生層圏に踏み入る事十数回という、十代の人間には珍らしいその道のオーソリティーであつた。が、私は初めからはこのアカデミッグな奴を、好きになれなかつた。別に深い意味はないんだが、俗に言うインテリの彼の体が、ガラスで造られているかの如くデリケートでアブノーマルなのと同様、その精神も、そう思えたからなのだ。とに角、右と左のように性格が私と対称的な彼であつたが、話し合つて行くにつれて、彼の一かけら、一握りの土を愛する心は、自然を愛する傷心の私の心と融和せずにはいなかつた。

高山の夜は、冷々とせまつてきた。だが、私達は、月光を遮ぎることをせず語り合つた。次第に私は口を閉じ、ただ彼の話を聞くだけとなつた。それは、あまりにも彼の話が奇怪であつたから。話はある夏、彼が化石を求めて道を失つた事に端を発する。青白い月光の中を彼の物語は流れていつた。

ついに闇の中に、灯とテントを見い出しました。だが、それはキヤンパーのものではなく、山窩のセブリ(住居)からのものでした。

山窩とは、貴方も、御存知でしようが、かかる文明の世を避け、尚、山から山へと穫物を求めて生活をしている狩猟民族で、多くは戦国時代から山奥にひきこもつた、武士の子孫なのです。明治時代になつても、彼等の「山窩のセブリを見た者は、帰る道を知らない。」という排他的で、謎めいた掟の為、行方不明になつたり、山刀の一撃を受けた猟師、釣人、登山家等の死骸があとを絶たなかつたそうです。だが、ほとんどの山窩は山を下り、藤村の「破戒」に書かれているような、部落民と、なつてしまつたのです。そして、現在では、未だに里人と交渉を持つ事をいさぎよしとしない、一部の山窩のみ、こうした昔ながらの自給自足の生活にあまんじているのです。もう昔のように日本国中の山を移住して歩く訳ではなく、移動範囲も、奥秩父、富士山麓、南アルプスの一部に限られているようです。僕の見たセブリは、林のわずかに開かれた所に、張られた三張りの飛白のテントと一戸の竪穴式住居でした。僕は、弥生式時代にあつたと同じようなかやぶきの小屋の前に立ちました。

三十五代清盛と名付けられた人が、この家の主人であり又部族の長でした。すこし垢汚れたとはいえ、彼の顔は、絵に描かれた清盛が抜け出たかと思う程似ており、彼の名同様、山窩の中には戦国武士だけでなく、平安・鎌倉の都人も居る事を証明して居りました。しかも彼は、小学校卒という山窩で最初の学歴の持主でした。彼の家は極く簡素で、中央に一段と低く炉が堀つてあるほかは、所々に乾草が積んであるだけの、納屋同然の小屋でした。目を引く物と言えば、おそらく系図でも納めてあるのだろう所の、古びた木箱、幾張りかの弓と一緒に立てかけてある、二連発銃だけです。家族は、彼同様、僕に快く一夜の宿と食事を与えてくれたその妻と二人の子

供、それに、はじめは排他的な目を向けた老婆の、五人暮しです。最初、老婆が、敵意を抱いている為に気まづい空気が漂い、子供までまじえた家内五人の者が何やら陰語で口論する迄に至つたのですが、この単純な老婆は、僕の〃私も、平家の血を受け継いでいる者で、桓武天皇第八代云々……〃のひとくさりにすつかり敵意を解き、他の人以上に僕をもてなしてくれました。鹿や猪の肉等、三十五代目の清盛として、面目の保てるだけの食事が準備されましたが、この事は、僕に滅び行く民に対しての憐憫の情を起させるだけでした。僕には、いかに彼等がその日の食に窮しているかが、彼等の身体や子供の目、それに、出された肉のすべてが、長期間保存されたらしい乾肉やスモーク(燻製)であることから察せられました。ふと、吸い物椀を持つた僕は、その中に黒い貝を見付けて驚きました。(こんな山中で、二枚貝がとれるなんて……)彼は、僕が、不思議そうにしているのを見て笑いました。

「なあに、川貝ですだ。カラス貝ですだ。」

僕は、かつて研究室の水槽で、タナゴに産卵をさせようとして幾度も失敗しましたが、最後に〃その卵はカラス貝にのみ産みつけられる。〃と本に書かれてあるのを知つて、東京からわざわざ千葉の手賀沼まで、貝殻を拾いに行つたことがありましたが、この椀の中のよりは、ずつと小さかつたし、それが食べられるなんてちよつとも知りませんでした。なおもその貝について知りたがつている僕に、彼はこんな話をしてくれました。

「この貝は、ここから半里程先の、黒貝沼からとれますが、その沼にやこんな伝説が有りますだ。なにぶん昔話じやで笑わんで下され。……昔、笛吹川(多摩川の源流と同名だが地理上からみて別の川と思う。)は、忠度山で二つの流れに分けられていましたんじや。忠度山の南のすそを廻つて東に流れているんが笛吹本流で、忠度山の北の崖と知盛山の、南のきりたつた崖との間の狭谷を流れているのを、笛吹落しと言つて、山窩の毎夏の狩猟場とされていたんじやが、ある時、カラス天狗が忠度山から大岩を投げ落して笛吸おとしの流れを止めて沼にしてしまつたそうじや。山窩は、飲水がなくなるし、天狗の為に猟場を荒らされたんで怒り、ついにある強者が一矢でカラス天狗を忠度山の崖から射落してしまつたそうじや。」盛清氏の話が、クライマツクスに達した時、老婆がたまりかねて、横から口を入れた。

「あんたさん、その豪傑ちゆうんは、この子の……そうそう、三十一代前の御先祖さんですだよ。」

「こりや、だまつちよらんか婆さん。そんなもん迷信じや言う。」

とこう言われて老婆はひつこみましたものの、いつまでも例の陰語で、彼女の息子にぶつぶつ不平を吐きかけていました。三十五代氏は、そんな老婆にかまわず話を続けます。

「谷底の岩に身を砕いてカラス天狗は死にましたが、その呪われた黒い羽の一枚一枚は、カラス貝になつたといわれているんで、近頃まで誰も黒沼貝で、魚や貝を取るものはいなかつたですだよ。いやいや、ほんに馬鹿らしい迷信ですだ。ハハハ……。」このように、迷信だと一笑に附していた彼は、急に笑いを止め、うつて変つた真面目な語調でこう語りました。

「ですが、ここに不思議な事が起つたんで……。というのは、わたしのおやじから迷信を捨てるよう沼の魚、それにカラス貝までとり始めたんです。ところが、その頃から沼に白い幻が現われたり、崖

に立つと体がさけたり。又カラス貝を食べた者の中から、一、二年経ると一人二人と原因不明の病気にかかつて死ぬ者が出てきたのです。おやじもその犠牲者の一人なんです。……別に食い物に困るような山窩ではないんですが……。」

「そうでございますだ。あんたさん。山窩の手に弓矢ある中は死んでも食べ物にや苦労しませんですだ。」と老婆が再度口出しをしましたが、彼はさびしそうにうなづくだけでした。

翌日、彼に案内されてまず黒貝沼を足元に見下す知盛山の崖際に立ちました。緑色の小さな沼がそれである事はすぐわかりました。それよりも、沼のぐるりを囲んだ黄褐色のカーペットの如きものが何んであるかに、目をひかれました。しかし、それ以上に僕の目を捕えた奇観、それは昨夜彼が話した二すじの流れを一すじにしてしまつたという巨大な岩でした。その巨岩ゆえに沼がつくられ、流れは忠度山の南におし曲げられているのです。例の伝説ではカラス天狗が崖から投げた事になつていますが、現在も沼のあちらこちらに大きな岩石が見えるところから、流れであつた頃は腐蝕土なく、巨岩の多い川であり、かの巨岩は、火石運搬作用によつて上流にのぼりこのような奇観をつくつたものだと推察しました。御承知の事と思いますが、運搬作用にとつて、小石は中流に、砂は下流に運ばれ、そして水流におし流される事のない巨岩は、その前部の小石が流される為に前方に回転しながら何百年の間には、数十メートルも上流に運ばれます。このように理論上ではありえる筈の現象ですが、実際は日本に急流多しと言えどもかかる奇観はおそらくこの笛吹川以外に見る事は出来ないでしょう。僕は感動を、五、六枚のドローイング・ペーパーに託しました。第一の謎は解けたのです。

沼へと下る途中、沼からの湿気を含んだ上昇気流が僕達の顔をぬらします。試みに紙をちぎつて気流に乗せると、急勾配その山をはうようにして頂きに消えました。この事は僕に第二の謎を解かせてくれました。何故ならば、〃体が裂けた〃と言う現象は、俗に言うカマイタチ、つまり、急激な気流の変化の起る山などではしばしばエア・ポケット（真空地帯）が発生し、そこに足を踏み入れると体内の空気が体外にのがれようとして体を裂くのです。しかし、めつたに死ぬ事などなく、大抵は足に鎌で切つたような傷を負う位なものです。

例の黄褐色のカーペットとは、モウセン苔によく似た捕虫植物で、沼辺一帯に飛び交うアブやハエを捕えて食べる無気味な存在でした。彼等は掌のような葉を開き、昆虫が少しでもそれに触れると粘着液で羽や足を捕え、それから序々にこの自由を奪われた囚人の全身を握りこぶしの中に吸い込んでしまうのです。永遠に飽く事を知らぬこの餓鬼の口が再び開かれた時、もはやその舌の上には汚点すらついていないのです。こんな行為が辺り一面で起つておりますので、僕の学究的な目は一層見開かれました。水中に目を転じると、そこにはカラス貝の他に、三尺もありそうな鯉、鮒、タナゴ、ウグイ、ヒガイ等相当種の魚を発見する事が出来ました。それと同時に、第三の謎（すなわち原因不明の病気）を解く鍵をも発見しました。岩に吸い着いた二センチ足らずの巻貝こそ、実はツツガムシ病やジストマ等の一連恐ろしい風土病の媒介者モノアラ貝とカワニナなのです。この貝は、ジストマや、日本住血吸虫の幻虫の第一中間宿主となり得るのです。寄生虫はさらに淡気魚の体内で不完全成虫となります。ここでは、鯉や鮒が第二中間宿主でしょう。最後

に、生の魚肉を食した人間の体内で完全成虫となり得た寄生虫は、内臓器官を破壊し、血管を食い破り、一年後には、人間を死に到らしめるのです。どうもカラス貝は無関係のようでしたし、山窩は、〃事実、鯉のあらいが好きだ〃との清盛氏の答でした。

清盛氏は僕の調査結果にひどく満足の様子でしたが、僕にはまだ不満な点がありました。それは、第四の謎である〃白い幻〃を、私は、ブロッケン現象……、つまり、高山の頂上などで日の出、日没の水平に近い角度の光線を背後から受けた時、自分の影が前方の蒸気の壁に映つし出される現象ときめつけたのですが、目撃者は、夜男二人が一人の女性の幻を、沼辺で見たと言うのです。「山窩は、うそを言わない。」と清盛氏の言葉は、僕を「科学的判断」と名付けられた狭い部屋から追い出しました。

僕がその夜、沼辺でその正体を見届けることを決心した時、三十五代氏の母は鹿の骨で作つた守り札をくれた上、何やら山窩のまじない（厄除けのらしい）を施してくれましたし、迷信排撃主義の清盛氏でさえ、カラス天狗退治に用いたといわれる由緒ある強弓を手渡してくれました。

しかし、それ等は不必要でしょう。が、それは、今貴方の考えている事とは違つた意味に於いてです。僕は、第三次元の世界の人間の事を考えていたのです。いや、人間と言えないかもしれまんが……。第三次元の世界とは、我々の現実の世界を第一次元世界、頭脳による理論上の世界を第二次元世界とした時考えられる、心霊の世界なのです。〃万物は相対に於いてのみ存し得る。Xが在する時、必ず反Xが存す。然れども完全なるXも、完全なる反Xも存する事はない。〃 僕はブロッケン現象以上に、この僕の説が満足されることを望んでいたのです。貴方は驚かれ、すぐには信用されないでしょうが。僕は冷静にこれらを考えていたのです。いや、単にそれを考えその存在を信じていたのではなく、僕自身第三次元世界の人、つまり反人間となる事を欲していたのです。僕は冷静です。貴方もそう思うでしょう。人間がいかに動物的であり、しかも〃考える〃武器の為にいかに醜悪になつたか……。すべての行動に主観が働くこの動物は、可愛いと言つて小鳥をカゴにおし込め、憎いと言つて蛇を殺す。かと言つて大自然の運行軌道をはづれているわけでもない哀れな存在。僕はこんな人間に最上級の悪口が言いたい。男性にも女性にも……。そうです僕の会つた女性の総てが、嘘つきで、自惚が強く、陰険で、邪悪で、低能で、醜いのです。それにくらべ第三次元世界の生活は、高尚で、清潔で、純粋で、美くしいのです。そうにきまつています。私は冷静でした。

何かあたたかくやわらかな雲の中に居るような感じを意識して頭をもたげた僕は、沼面に白い幻が立つているのを見ました。僕は極めて冷静でした。それはなにぶんにも不完全な姿なのですが、僕にはマドンナのように神々しく見られました。僕は無意識の中に立ち彼女に対しました。僕達は終始無言でした。偽りを知らぬ第三次並界の彼女には偽りなき心こそ必要なので、言葉などという軽蔑すべき手段はもはや不必要なのです。心による会話は短いものでした。僕が〃貴女の世界の者となりたいのです。〃 と訴えると、彼女は僕に、心霊のみが支配する世界の味気ない事を悟そうと努力しました。確かにそのように、僕のこの月よりも明らかな心は感じたのです。が、私の固い決意は、執拗に欲し続けました。すると彼女は「キミヨイザ、ミクニガヤマノ、ハヅキミヨ、ユクミチナクバ、ア

マカケヨカシ。」の謎の語を残して消えてしまいました。その時の彼女は、微笑していたようでした。

僕はきつと彼女に再会出来ます。その時が、僕の第一次元から第三次元世界への門出の日なのです。そして、その日は間もないでしよう。

Kの物語は終つた。私はねむかつた。だが、彼の物語の終りは、私のねむりを意味するだけでなく、彼の第一次元世界に於ける永遠のねむりを意味していたのだつた。

翌朝八時頃目を覚ました私は、彼の居ない事に気付く。彼の大切にしている鉱物採集箱もそのままなので、近くの山へ行つたものと思つていたが、二時間過ぎても帰らなかつた。不安をおぼえた私は、昨夜睡魔の為何気なく聞き流していた彼の言葉の数々を思い出していつた。それらが死を意味している事は鈍感な私にもわかつたが、その行方については全く心覚えがない。やつきになつて記憶をたどつた私は、彼が第三次元世界の女の言葉だと称して告げた「キミヨイザ、ミクニガヤマノ、ハヅキミヨ……云々」の言葉を思い出し、これが唯一の手がかりとなる事を悟つた。

「君よいざ、御国（三国）が山の、端月見よ、行く道無くば、天翔よかし。」こう直して見たが、時日がはつきりしない。しばらくしてやつと、〝端月（山の端からのぼりかかつた月）見よ〟は、〝葉月（陰暦八月と解さない）三夜〟つまり八月三日夜との意味をも持つている事がわかつた。

「八月三日、山の端に月の出づる頃、ミクニ山から私の世界にお連れしましよう。空間にある三次元の世界への道がわからなければ、ただ貴男が天翔るのです。」と例の幻は言つたのだろう。とに角それがまどわしの言葉を知つたからには、一刻の猶余もならない。地図でミクニ山を探して彼を追わねば……、何故なら、私が起床した時には彼の毛布からぬくみが去つていたからだし、又現在私の腕時計は十時四〇分を示しているのだから―。

だが、地図にはそのような山が記されていなかつた。あきらめの気持もおこつたが、とに角一日の最長歩行距離を五〇KM、山道では三五KM、地図上にはこの小屋を円心として半径三〇KMの円を描き、円内の一つ一つの山を吟味していつた。

十一時、だんだん焦燥にかられてきた。だが彼のように頭のきれる人間でない私はこの外には為すべき手段を知らない。

十一時五分、半ばあきらめの目に県境線がとびこむ。追つて行くと甲武信岳にぶつかる。そうだ、この山だ！ 甲武信岳とは、甲州（山梨）、武州（埼玉）、信州（長野）の三国々境の山の意なんだ！ 念の為ガイドブックを調べると、別名「挙岳」又は「大三国山」と呼ばれていることがわかつた。

地図の上を回転していつたコンパスは、三十五KMという数字を出した。七時間足らずでかかるけわしい山道を踏破する奴は、山を住家とする者の中にも居ないのじやないか？

だが私はやつてみせる！

一一時六分、出発！

〇時七分、狼平、

同じく四八分、竜喰山！

一時三九分、唐松尾山！

体内の水分は全部汗になつてしまつたのか。体力はすべて出しつく

されたのか。私の皮ふからは絶えず汗が吹き出し、咽は乾きを訴え、足はしびれ、歩みを妨げた。しかし、一杯の水は私の死を意味し、ひとときの休息は彼の死を意味する事を私は知つていた。

二時五一分、笠取山！

私はついた、〝今迄の倍の速度で歩くから〟という自已への約束で五分の小休止をとつた。その間計算したところによると、平均時間四KMで歩いていたのだ。これからのけわしい道を五K〃の速さで後四時間歩かねばならなかつた。絶望！々々々々

絶望感は、危険な原生林の近道に私をさそい込んだ。

原生林、それは磁石の夜光塗料が青白く浮び出す日光の恩恵を知らぬ処女林であり、数百年の樹齢を持つ苔むしたツガが無数にそびえその枝からは女の髪の毛のようなサルオガセが地に触れる程に垂れ下がり、地には一歩踏み込む度に黒緑色の水を吐き出す苔が一面に敷かれた無気味な密林であつた。くさつた木の臭いだろうか、人間の体をも腐らせてしまうように臭い。

突然何かのかたまりが首すじに落ちてきた。それは一瞬ほどけて一つ一つの動めく生物となり、焼けつくような痛みを私に与えながら首や背に貼り着いた。それが怖ろしい山ヒルの群であり、引きはがすには、自分の肉もはがさねばならぬ程の力が必要な事を知つていながらも、痛みと恐怖からおもわずそれをむしり取ろうと試みていた。山ヒルは血の臭いを求めてますます降つてくる。私はただ夢中で走つた！ 身体についていた最後の山ヒルの細い体が、ゴムマリのように膨らんでポロリと落ちたのを意識しながら貧血と疾労の為倒れてしまつた。

やがて起き上つた時、そこが原生林のはづれである事に気付き、ともあれ自分の生きている事を喜んだ。しかし、Kの事を忘れた訳でもない。何故なら、ほとんど無意識の中に甲武信岳に通づるそのはるかな道を、一歩一歩たどつていたから。だが、青いたそがれの中で私は何も考えなかつた。自分が何故歩いているのかと言う事も、Kの事も……。私はその道同様に長く思われたたそがれの中で何も見なかつた。時計も、月の昇るだろう東の空も……。ただ空虚な頭の中には、コノハヅクのブッポーソーブッポーソーと鳴く声のみが木霊し、うつろな目には天翔るKの姿が霞んでいた。頂上に辿り着いた時、月はすでに山の端から離れていた。

夜を徹してめらめらと踊るダビの炎の前で、私は悲しい気持になれなかつたばかりか、むしろ晴々しい気持だつた。

（第四人称〈自意識〉過剰故のKは、プラトニックなファンタジーを追つて第三次元の世界へ去つたのだ！ やつと自分を一人で生きられるんだ！）

数日後、すべてが健康に復した私は、再び雲取小屋に引返すべく歩いていた山道に、春咲く筈のヒトリシズカの赤い穂を見付け、思わず微笑した。

（ひとはこの花を〝淋しがりや〟と言うが、私はこんなに自已を楽しく美しく生きている花を見た事がない。ひとはフタリシジカを〝ロマンチックな花〟と言うが、私はあんなに苦悩の毎日を送つている病弱な花を二度と見たくない。）

小屋には、私の鉱物採集箱が待つていた。例の鏡ものぞいて見たが、もうそこには彼の姿が見られなかつた。その事に満足した私は、思わずつぶやきました。

（ひとりしづかの花咲けり。）

―完―

因果

二年B組　渡部　斉

一、それ以前のこと

今から一二〇〇年以上も昔のこと、唐では栄華を誇つていた玄宗皇帝の地位が、ふいにゆり動かされて不安におののいたことがあつた。

当時、楊貴妃は玄宗皇帝の深い寵愛を一身に集め、贅（ぜい）をきわめていたが、その楊貴妃にとり入り、三郡の節度使となつていた奸臣安禄山が、皇帝の椅子をねらつて大反乱を起こしたのである。

この乱には節度使史思明や、楊貴妃の兄楊国忠などが荷担した。これを『安史の乱』という。

国都長安を逃れて、一時、四川におちのびた皇帝は、その途上、諸兵の強硬な態度に迫られて、悪因の楊貴妃の命を、忠臣の一存にまかせることを余儀なくせられた。

こうして群臣の前にひきすえられた妃は、容赦なくその首をはねられた。

晩年の皇帝をして、奢侈な生活に堕落せしめ、ために、安禄山らの反乱の因をなした楊貴妃の、首のなくなつた白いかたまりは、不気味に人々の前にうつぶしていた。

一瞬、そのかたまりから、金色の針でその全身をおおわれ、数本の尾をふりたてた、異様なけだものが、天にかけのぼり消えてゆくのを、人々は呆然とながめていたという。

これこそ、世にもまれな美にその姿をかえ、印度、中国の政道を乱し、のちには日本へも渡つてきた、千年のごう（劫）をへた白面金毛九尾の狐だつたのである。

ところで、日本からの遣唐使、吉備真備や僧旻らが、帰朝の途につかんと、唐の人々と別れを惜しんでいる頃、一匹の小狐が船におどり込んだのを、人々は不思儀な面持でみていたということだ。

こうして、九尾の狐は、なんなく日本へやつてきて、ひそかに出現の機をうかがつていたのである。

やがてそれから四〇〇年後、平安時代の末期に、鳥羽院の前に、才色無比の女、玉藻前（たまものまえ）が現われ、院はこれを溺愛した。この玉藻前が九尾の狐の化身であることはいまさら改めていうまでもない。

こうして、保元の乱の兆は、徐々に現われはじめた。

が、玉藻前は、日本の政道を乱すよりも先に我が身をほろぼされてしまつたのである。

すなわち、このころ宮中の陰陽道（占い）をあずかつていた阿倍氏に、泰親という傑物がおつたが、彼は、玉藻前の妖しい霊は妖怪の化身ではなかろうかと、一人心をいためていた。それで、ついに心をきめた泰親は、ある日、突然、三国伝来の神鏡を玉藻前の顔につきだしたのである。

ふいをつかれて、さしもの妖狐も思わずそれに正体をうつしてしまつた。

大喝されて、今や全くの怪奇な姿をさらけだした狐は、槍でつかれ矢でいられながらも、金色の毛をさかだて九本の尾をふりたてて、

必死で宮中をとびだし、玉敷の都を離れ、鳥がなく東国へと逃れてきた。

しかし、とうとう那須野原においつめられ、進退ここにきわまつた狐は、一つの大きな石と化してしまつた。

これを殺生石（せつしようせき）という。

この殺生石が、盛んに毒気をはくので、誰もそこに近よることができなくなつた。

その後、室町時代は三代将軍義満の頃、諸国をめぐり歩いていた玄翁（げんのう）和尚は、飄然として那須野原を訪れて、ひとしきり調伏の念仏をとなえ、殺生石に近づいた。和尚は手にした鉄杖で、殺生石を三度たたいて言つた。

「汝、元来石頭、性いずれより来る。霊いずれより来る。」

又たたくこと三度、ついにこの石は、震動して汗を流し、真二つにわれて一つはそのまま残り、他はコナゴナになつて四散した。

このとび散つた粉にまで、狐の執念が消えず、虻（アブ）や蚊となつてのちのちまで人々を悩まし、残つた石は、今もなお毒気をはきつつ、栃木県那須郡那須温泉附近にある。

この玄翁和尚が、この後も漂泊を思いやまず、諸国をめぐり歩くうち、越後の国から岩代の国へぬけようとしたことがあつた。和尚は峠のふもとの御堂で一夜をあかし、明くれば早速民家につかんと、老いた足に、わらじの緒をしめなおして出立したが、途中ひどい山路に悩まされて、ようやく小さな山里についた時は、黒い法衣から秋の夜露がしたたりおちるほどであつた。

その夜、和尚は、里のはずれにある家に、心温くもてなされ、旅の心をなぐさめた。が、翌朝、和尚は高熱で臥し、よるべない身は見も知らぬ里人の手にゆだねられた。

厚い看病のもとに、ようやく全快した頃は、外は深い雪でおおわれていて、旅にでることなど思いもよらず、ついにその冬は、温い心づかいの里人達の世話になることになつてしまつたのである。

僅か八戸のこの里には、夏でもめつたに峠をこしてくるものがなく、隣部落に通じるただ一つの出入口は川の両岸がけわしくきりたつているので、冬は誰も出入りすることができない。

玄翁和尚は、時々里人達に仏の道をといたりして春を迎えた。

余生のいくばくもないことを知つた和尚は、里人の厚意にあまえて、庵を結んでもらつて、その後もこの里で暮すことになつた。

山桜もいつか散り、白い梨の花が咲きはじめた頃、和尚は隣部落に通じる難所にいつて驚いた。

川の向う岸は高い断崖がきりたち、二十間隔てて、間に黒々とした深淵をはさんだこちら側では、川の流れが岩山のすそにただよいたわむれており、そこより一段上は、わずか三間ばかりの傾斜をなし、そこからさらに上は、向う岸と相争うが如く、岩山が小さな天につきたつていた。

その三間ばかりの急な傾斜には、人々の歩く小さな足場が点在していた。

和尚は、爪先き立つて、この難所をこしてみると、その道はおよそ十間ほど、そこを通ると、あとは細々とした白い道が草のあいまに消えて、隣部落に通じるらしかつた。

その次の日から、和尚は毎日その難所に行つて、例の鉄杖で岩をたたきわり、二間の巾の道をきりひらいた。

里人のよろこびはいうまでもない。
和尚はこの部落を奥山部落と名づけて、七十一才でここで入寂した。
和尚の死後、里人達は、和尚が鉄杖をもつた姿の石地蔵をつくり、和尚のきりひらいた道の一歩手前に安置して、その地の山の安全を守つてくれる神としてこれをあがめた。
この石地蔵は、玄翁様といわれて、現在に至るまで、奥山部落の山の安全を守つてきた。

二、それからのこと

この部落は、今は四十数戸の部落となつているが、この部落の家は皆、姓を奥山となのつている。
ここに奥山文作老人が住んでいた。
子供好きな文作老人は、好奇の目を輝やかして聞き入る子供達に、白面金毛九尾の狐の話や、この地につながる玄翁和尚の伝説を、よく語つてきかせた。
山の神の玄翁様を深く信心しているこの老人は、何かというとすぐ子供達に、玄翁和尚の話をもちだすので、ある日子供達は言つた。
「おじいさまは、いつも玄翁様の話ばかりしなさる。今度から、げんのうじいさまつてよぶべえな。」
このあだなをきかされた時、文作老人は、
「あっはっはっ……げんのうじいさまか、わっはっはは……」
と、しばらくの間、のどぼとけをお日さまにみせつぱなしでよろこんだそうだ。
子供達の無邪気なあだなを、老人はこの上もなく光栄のものとしてうけとつたのである。
こうして、親にも子にも、みんなに親しまれた文作老人も、九十いくつかの冬、かえらぬ人となつた。
玄翁和尚が開いたという道の附近の川を、玄翁ケ渕とよんでいる。奥山部落を最上流とするこの川は、幾度かその流れの路をかえていることを、いくつかの細長い沼が物語つているが、玄翁ケ渕のところだけは、せまい山の関所から流れでて、昔からその姿をかえないでいる。
人々は、ここを通るたびに、又石地蔵をみるたびに、玄翁じいさまの文作老人を思いだし、自分の幼少時代を想いうかべて、懐しんだものだつた。
このように村人に親しまれ、うやまわれている石地蔵には、いつも新しい真綿がやわらかくかけられていたし、時には、皿にもられただんごなどがそなえてあることもあつた。
第二次世界大戦で、この奥山部落出身の奥山春蔵が、妻と二人の子供をつれてここへ疎開してきた。春蔵は文作老人の孫である。
この外に、遠い縁故をたよつて疎開してきたものが五六家族もあつた。
当初、部落の人達は、疎開してきた彼らを白眼視した。何百年もの間、この地を一歩も離れずに暮している田舎の人には、口さきだけのそこぬけの人のよさがある反面、よそ者を相入れぬつめたい他人行儀と、打算的な考がいつも用意されていた。
が、戦争も終り、彼らが永住してくると、いつか仲間入りした格好で、部落は、表面上は又、おちついた昔の姿にもどつた。

変つたことといえば、玄翁和尚がきりひらいたという道を、日に朝と夕の二度、バスがかようようになつたぐらいなものだつた。
春蔵が疎開したのは、長男の信雄が十二、弟の行雄はまだ八つの時だつた。
兄弟は疎開したその日から、田舎の子供達の中にとけこんで、文作老人の子孫にふさわしい奥山部落の者となつて成長していつた。
こうして、信雄は二十三、行雄が定時制高校の四年生の夏休みの時、妙な噂が流れた。玄翁ケ渕のあたりに鉄鉱脈があるというのだ。この情報を村中に広めたのが、農業のかたわらひらいている、部落でただ一軒の旅館の娘の房子だつた。
房子は行雄と同じ高校の三年生である。この学校は、部落から二里ほど離れた村の中心部にある。奥山部落からの通学生は、行雄や房子のほかに、行雄と同級の正彦や、一年生の秋子と正子の三人だけだつた。
房子の家の前に五六人の若者が集まり、その中で房子は男達の視線を気にしながら、昨夜鉄鉱脈のうわさを聞いた様子を語りだした。
房子がこの頃よく来る三人連れの泊り客の部屋に夕食をもつていた時、一番若い男が言つた。
「フサさん、今にこの奥山部落は大もうけするよ。」
房子の家では、彼女をよぶのに、フサ、フサとよぶ。この男はそれで私の名前を知つたのだと、房子は内心驚きながら、
「どうしてですか。」
と、さりげなくたずねた。
「玄翁ケ渕のあたりに、鉄鉱脈があるらしいんだよ。」
「ほんと?」
「本当ともさ、だから僕らが、こうして毎日調べにきているんだよ。」
若い男が房子とニコニコ話していると、側の男がニヤニヤしてわりこんできた。
「あしたは会社から五六人くるからね、部長も一緒だし、サービスをよくしてくれよ。」
房子は黙つて部屋を出ると階段をおりた。上の部屋からは笑い声がきこえる。
房子は、先づ父と母に聞いてきたことを話した。
翌日には、せまい部落の人の大部分が聞いて知つていた。
それで、青年達が集まつてきて、その真偽を房子に聞きにきたのだつた。
話し終つて少し上気した房子の目は、時々行雄の横顔にそそがれる。
その行雄は、曇りがちな空をみあげてつまらなそうだ。もしかすると房子の話など上の空で、昼休みの魚とりのことを案じているのかも知れない。
ほかの男達は、深刻ぶつた顔付きで房子の口もとをながめていた。
それから十日ほどしてから、鉱脈を確かめるために玄翁地蔵のすぐそばに横穴をほりたいと、正式に部落に話がもちこまれた。
部落には反対する者もいたが、共有地に穴をほるというので、かなりの金が支払われた結果、皆黙つてしまつた。
まもなく部落の青年達がやとわれて、岩がくずされ、ダイナマイ

トのごう音は、玄翁ケ渕の岩をたたき、二度、三度、四度と山にこだまして消えていく日が続いた。
行雄達の学校の長い休みも終つたが、行雄も正彦も一週に、火木金土のたつた四日間の学校も休んで横穴ほりに出ていつた。
彼らは、毎日作業の安全を願つて、玄翁地蔵に合掌した。
ただ、疎開してきた新二や松本技師は、黙つてその様子をながめていた。
松本技師とは、ここの現場監督で、最初にこの鉱脉を発見し、房子にしらせた男だつた。彼はこの鉱脉の発見に、自分の成功をうたがわなかつた。成功をおさめた自分の将来の姿が、いつも彼のマブタの裏で生活していた。ダイナマイトの激しい地ひびきが、快よく彼の感覚を刺激し、マブタの姿はそのたびに鮮明をくわえていくのだつた。
房子の顔が、いつのまにかこの生活に加わつていた……。

九月の中旬の土曜日の午後、秋子と正子はバレーボールをやつていくというので、房子は一人で帰つた。
山の色をかえはじめた秋の風は、自転車の房子の髪を快よくくすぐつた。土曜日は自転車で通学するのが、彼女達の習慣だつた。
房子は途中でハッパの音を遠くに聞いて、急ぎだした。
急いでいつたら、行雄はまだ昼休みで玄翁様の附近でやすんでいるだろう、来週から学校にいくようにすすめようと思つていたのだつた。
房子がついた頃は、岩肌にポカッとあいた口の中には、まだ白い硝炎が岩煙と共にうすくたちこめていた。

「オス、今日は早えなア。」
正彦が自転車からおりた房子に声をかけた。信雄や新二や辰也や義和はいたが、行雄も松本技師もいなかつた。
「こんちは、行雄クンは？」
「行雄は、向うの山だ。」
正彦は川の向うのきりたつた山の方にあごをつきだして見上げながら言つた。
「松本さんと政司と行雄で向うの山を調べに行つたんだ。今頃てつぺんまでいつたかな。」
正彦はそういつて立ち上がり、
「ホオーイ」「ホオオーイ」
と高い声でよぶと、こだまが二度ほど答えたが、今度は本当の返事が二度、三度こだまをよんでかえつてきた。
まもなく岩の上にかぶさるようにはえている小さな木をかきわけて、三人がでてきた。
「あ、あれは政司だな。」
「うん、あ、松本さんも行雄もいるや。」
新二達も立つてみていると、
「オーイ、バカにいいけしきだぞオ。向うの村が丸みえだア。」
と行雄がどなつた。
「ヤッホー」
房子が手をふつてこたえると、信雄が
「房子はハイカラな言葉を知つてるなア。」
と、笑いながらいつた。
房子がそれに笑いかけて、又上をみたとき、

「アッ」
と、六人が同時にいつて息をのんだ。
行雄と政司の足もとの土がくずれて、二人の身体が中にうく瞬間だつた。
房子は、政司がどこかにしがみついて、上にはいあがる姿などには気がつかなかつた。
ただ、岩かどにぶらさがつてもがいている、行雄の大きな身体がみえるだけだつた。
行雄の足が上にのばされた時、それまでささえていた岩が、ゴロッとはげて、その身体はもんどりうつてころがりだした。
行雄をたすけてくれなかつた岩のかたまりは時々岩肌にはねかえり、不吉な音を残して、右にそれて川原におちた。
一個のかたまりとなつた行雄も、山にしがみつこうとして腹バイになつたまま、十メートルもすべりおちたが、今度は、ゴロゴロッと転がつて、フワッと中になげだされた。
ヒイーッというような声が、はじめて房子の、のどからしぼりでた。
ゆびさきも動かせなかつた房子が、悲鳴によつて動作の感覚をとりもどし、フラフラッと二三歩前にでてたおれそうになつた。
新二がその両肩をぐつとおさえた時、房子の目には、まがつた棒のようになつて回転しながらおちていく行雄のあわれな姿がやきついて、再び動くことができなくなつた。
ドボッとにぶい音を残し、黒々とした玄翁ケ渕の水に、僅か白いしぶきをあげて、行雄の身体は消えた。
波紋がゆるやかにきえていつても、誰も声をだすことができなかつた。
房子が大きく前にゆらいだ時、消えた波紋の中から、バシャバシャと何かが動いて、又波たたせた。
何かわけのわからぬ声をだして、房子はきちがいのように川に向つて走りだした。
そして、信雄と正彦が、くちぐちに
「行雄だ。」「行雄だ。」
と叫びながら房子のあとをおいだした。
奇蹟だつた。何十メートルの山の上からころがりおちた行雄が、今、よわよわしく水の中でもがいているのだ。泳ごうとしているのだ。
信雄も正彦も、辰也も義和も房子を追いこして、奇妙な声をはりあげて川に向つた。
彼らは、上衣もズボンも地下たびもみんなつけたまま川にとびこんだ。川の中でも何やら叫びながら、行雄に向つてぬき手をきつた。
川原にとびおり、水の中にまで走り込もうとした房子を、新二は又無言でうしろからおさえた。
助けあげられた行雄は、方々から血をにじませていたが、頑丈な彼の骨は、全然異常がなかつた。
ようやく人心地ついた頃、
「玄翁様のお蔭だ。」
とひくくつぶやいて、行雄は山から目を転じて、石地蔵をおがんでいた。
そのそばで、一生懸命に血をふいたりして、房子は、声をころして泣きつづけていた。

その日から四日後の水曜日、房子と行雄はつれだつて魚つりにでかけた。
短いつりざおをかつぎ、小さなバケツをぶらさげた行雄の、左のこめかみには黒いかさぶたがあつぼつたくくついていた。白いほうたいが右手をつつみ、左の手首にもまかれてあつた。
行雄は、不自由な腕のフナつりの助手に房子をさそつたのだつた。房子はよろこんで二人分の弁当をつくり、ブラウスをきかえズボンをはいてついていつた。
三十分も細い道を行くと沼がある。
二人は木陰に並んで腰をおろした。川のせせらぎが木々の合間からかすかにきこえる。すでに日は高かつた。
房子がえさをつけてやると、行雄がまもなくつりあげる。小さなフナだつた。それを房子がはりからはずしてバケツの水の中に入れる。房子は時々キャーキャーいうと、
「シーッ、フナがにげてしまうから、しずかに。」
と行雄は声をひそめるので、房子は又それを笑つた。
しばらくして、房子が何か話しかけても、
「魚つりは黙つているところがいいんだからしずかにしていてくれよ。」
と、行雄はそれ以上返事をしない。
房子は、一人でニヤニヤしていたが、
「ただいまよりストライキを決行します。」
と、おどけた調子でいうと、両手をくんでまくらにしてねてしまつた。
そんな様子を、行雄はチラとみて、目をそらしつり糸をあげて立ち上がり、
「もう十二時半だ、ハンストをやりたくなかつたらおきろよ。」
と、左手をさしだして言つた。
笑いながらその手につかまつておきた房子は、なんとまあ、がつしりした手なんだろう、と手をつかんだまま、川の音のする方に歩いていつた。
房子は行雄の左手をあらつてやり、自分も、魚くさい両手をよく洗つた。
沼の木蔭にきて、二人はにぎりめしを食べはじめた。
行雄はうまいなアといいながら、どんどんたべる。房子は、自分が作つたものをほめられてとてもうれしかつた。
みんな食べ終つた行雄は、さつき房子がしたようにねころんで、
「秋の空はきれいだなア。」
と感心している。
房子は行雄と並んで腰をおろして話しかけた。
「行雄クン、どうして山からおちたの。」
「どうしてかな。房子が手をふつてたんで、よくみようとして一歩でたら、空にとびだしたんじやないかな。」
「うそばつかり。でも、もし行雄クンが死んだら、フサもあの川にとびこんで自殺しようと思つたつけ。」
「バカなこというなよ。」
「ホントにそう思つたんだもの。房子の夫は行雄、と神様が決めてしまつたことと前から思つていたから、行雄クンが死んだら、一生オールドミスでしよ？　それよりは死んだ方がずつと……」

「おい、ふざけるのよせよ。」
むくりと起きあがると、行雄は最後までいわずにさえぎり、さらに続けた。
「俺はまだ十九、房子は十八じやないか。俺の兄貴は二十三だ。俺の結婚は兄貴のあとだ。」
「じや、それまで待つてればいいんでしよ？」
「よせよ。まだ俺は房子を嫁にもらうなんていつてないぜ。それに、俺の嫁になるには條件がきびしいから房子ではダメだよ。」
「どんな條件？」
「まず第一に、妻は夫に従順なこと。」
「わア、封建的だ。でもまあいいや、それから？」
「第二に妻は夫を愛し夫にも愛されるような人柄であること。第三にうそついたり、かくしごとをしないこと。第四に子供の教育を正しくできること。第五に美人であること。第六に……」
「まだあるの？」
「第六に健康で百姓仕事ができること。第七に料理裁縫がうまいこと。その他いろいろつていうところだなア。」
「じや、それ全部守るように努力するからいいでしよう？」
「ダメ、ダメ、美人であることは認めてもあとは全部ダメだ。……ダメかな。あれ、ダメでもないな。……第一、第二、第三……。」
「ほら、いいじやないの。」
「……」
「いいでしよう。」
「房子、お前本気でいつているのか？」
「うん、第三の夫にうそをつかないこと、に絶対反しません。」
「へえ、房子が俺の嫁さんか。考えてみるかな。」
行雄はそういうと又草の上にねた。
房子はくびをすくめると、
「結婚の條件はこつちにだつてあるんだけどなア。」
「どんな？」
「第一に相手は行雄クンであること。」
「こいつ、それから？」
「第二に行雄クンは房子夫人を愛し、且つ愛される人柄を失わないこと。第三にうそをついたりかくしごとをしたりしないこと。第四に子供の教育を正しくできること。以上。」
「なんだ、たつたそれだけか。俺のマネゴトみたいなもんだな。」
「じや決心した？」
「まだだ。その前に昼寝してからだ。」
房子はそれつきり黙つている行雄の日やけした顔をじつとみていた。
目をつぶつた行雄のまつげがとても長かつた。しばらくすると、わずかに開いた唇から白い歯がのぞき、かすかな寝息がもれていた。顔の左の傷あとがいたいたしかつた。
いつまでもいつまでもそれをみていた。
彼女はそつと立つて、行雄の顔に自分のてぬぐいをかけてやつた。木蔭はいつのまにか行雄の顔を通りすぎていた。
彼女は弁当を入れてきたかごをもつて秋の山へ入つていつた。
彼女がカゴにあけびと山ぶどうをたくさん入れて帰つてくると、行雄は大の字になつてまだねむつていた。
せつかくかけてやつたてぬぐいは、風にとばされたのか草の上にの

つていた。
彼女はかごをおろし、てぬぐいをひろうと川の方に歩きだした。やぶをくぐり、木にものぼり、山をかけ歩いてきた彼女のくびすじに秋のそよ風は、ひんやりと通りすぎた。
川におりて彼女は顔を洗い、ブラウスのボタンをそっとはずし、汗をぬぐつた。
彼女は、十八才の自分がいつでも行雄の嫁になれる身になつているのを誇らしく思つた。沼のほとりに帰つてみると、行雄はまだねていた。彼女は行雄の左側に腰をおろし、とつてきた山ぶどうを一つぶ口に入れた。
たつた一つぶの甘ずつぱいぶどうが、行雄のかげと一緒に彼女の胸の中イッパイに広がつた。
行雄はひたいと鼻のまわりにいつぱい汗をかいてねていた。
彼女はそれをふこうと思つててぬぐいをもつていつたが、それが自分の肌にふれたことを思いだし、あわてて胸のポケットから、小さなハンカチをとりだして、かるくふいてやつた。彼女は自分の顔が赤くなつたことに気がつきながら、そのまま眠つてしまつた。
フト目をさますと、行雄の目がやさしく彼女をみて笑つていた。彼女はいつのまにか、両手を行雄の胸に軽くあてて、行雄の左腕をまくらにしてねむつていたのだつた。
彼女はねぼけたようなふりをして、自分の両手のある行雄の胸に顔をうずめて、はずかしさをかくした。
「左手がしびれてひどかつたよ。」
と行雄はいつになくやさしくいいながら、その手を下からまわして、房子の髪の毛をいじつていた。

うれしかつた。本当にうれしかつた。
彼女は夢の中のしあわせをにがすまいと、再びねむろうとした時、(ああ、現実の幸福なんだ。これが幸福つていうんだな。) と、いつまでも行雄の胸の中を離れなかつた。

その夕方、沼から帰つた行雄は、房子に自転車のうしろにのせてもらつて、玄翁地蔵の所へ行つた。山ぶどうとあけびを入れたかごを腰にぶらさげていた。
辰也、義和、政司の三人が休んでいた。ハッパをかける時間だつた。
「オス、この間はどうも……」
自転車からおりると行雄は言つた。
「オス、なおらねえうちから、もうアベックか。」
「房子がてんで行雄にほれてるつて知つて、松本さんや新二がやいていたぞ。」
「へえ、房子は俺にほれてんのか。それよか山ぶどうをもつてきてやつたから、くえよ。まず地蔵様から先きだ。」
腰からかごをおろしながら、二、三歩進んだ行雄は、アッ、と立ちすくんだが、すぐゲタをならして石地蔵に走りよつた。
石地蔵の頭に、すつぽりと松本の黄色くぬつた鉄の帽子がかぶされていた。
それをとりさり、足もとにころがした行雄は再び驚きの声を上げ、今度は大声で辰也をよんだ。
「たつ、たつ、はやくきてみろ、これは誰のあとだ！ だれがすわつたんだ！」

ゆびさして叫ぶ行雄に、辰也は少し離れて、
「新二だ。」
と小さな声で言つた。
怒りに大きくなつた行雄の目は、新二が腰かけたという石地蔵の台の石の、丸くこけのはげた所をとらえていた。
命が助かつたのは玄翁様のお蔭と、さらに信心深くなつている行雄にとつて、それは、あまりにもひどい侮辱に思われたのだ。
「バチあたりめ。」
行雄はひくくしつたした。
房子はいきどうる行雄の姿をはじめてみた。
その時、正彦と、行雄の兄の信雄が穴からでてきた。信雄は、
「よくきたな。やつぱりお前のいう通り、鉄鉱脉なんてありそうねえぞ。」
と語りだした。今は松本もすつかりしよげてあきらめているという。それで枝穴を途中からほりだしたという。そこにも鉄鉱脉が、利益になるほどなかつたら閉鎖するという。正彦と信雄はこの枝穴にハッパをしかけてきたという。まもなく奥にしかけに行つた松本と新二もでてくるはずだつた。
ここでは、しかけたダイナマイトにたばこの火で点火するという古い方法を使つていた。松本も新二もまだでてこない。
「どうしたんだ。爆発時刻だぞ。」
信雄は、あわてて黒い穴に一歩ふみこみ、両手を口にあててどなつた。
「松本さあん、新二、早くでろよオ。」
が、さらにでてくる様子はない。

信雄が、又両手を口にあてがつた時、
「ウッ」
と、うめいたその身体は、ドカアーンという音に二メートルも吹きとばされ、たたきのめされた。
行雄がこれを助けている間に、信雄と正彦がしかけてきた十発の枝穴のハッパはそのごう音をとどろかせてしまつた。
あの中に二人がいる。松本と新二がいる。たとい、今のハッパで死ななくとも、中の二人が奥でしかけたハッパが爆発したら……
その結果は、誰にでもわかりきつていた。
その地獄のハッパはいつとどろくかわからない。
行雄も、信雄も、房子も、皆、まつさおになつて一ケ所に立ちすくんでいた。
世の中の音が皆死んだ。静寂だつた。
一瞬、又一瞬、房子の血は一秒たつごとに、凝固して動かなくなるようだつた。
房子は、たえられずに行雄の腕につかまつた。
と、ガーン、ガガーン、ガーン、と数発のハッパが同時になりひびき、こだまは、山をうならせ、天を怒らせていつまでも消えなかつた。
山の中腹から、岩が一つカラカラところがり、二つになつて道におちた。
不吉な黒い穴は、白い煙をもうもうとはいて、誰もよせつけなかつた。
房子も行雄も、みんな黙つてたつていた。

一九五八・二・一九

たのしみは

先生方の一言集

先生方に「たのしみは……」という初句に、あとをつけて頂いた。以下先生方の今様曙覧ぶりをご披露に及ぶと。

校長　中村一勇

たのしみは学び遊びし幾年の昔をそぞろかえりみる時

今井弘

たのしみは嬰児泣けるを膝に移し吾が顔をみてなきやみし時

大島信六

たのしみは家にかえりてすくすくとのびてゆく子を抱くひとときー

大和久鈴江

たのしみは熊笹がくれゆく犬に声をかけつつ走るひと時

臼杵良一

たのしみはただスポーツと答えしが余りに多し去年の秋より

岡野猛

楽しみの多き事より悲しみの少き明日を願いて止まず

小山恒雄

たのしみはねむりては食む米の味食みては覚めて又ねむる時

柿元醇

たのしみはたまさか買いしレコードに心静かに針をおく時

菅原真静

たのしみは黙してあれど山の中夕餉の膳に一本つけし時

高田俊文

たのしみは久方ぶりに逢う友と思いのままに語り合う時

玉置文子

たのしみはたまさかに食む乾鯵に南の故郷しのぶひと時

栂野茂

たのしみは酒かす食いてうつらうつら春の一日をねむりける時

永浜先義

たのしみは丁沈の花の甘き香に若き日のこと思い出す時

成田武雄

たのしみは学校に来て生徒らの元気に学ぶ姿みる時

橋本雄司

たのしみは秩父の広場かけめぐり見事なトライ生徒があげし時

藤本純助

たのしみはなにかと問われたのしみをたずねあぐむもおろかしきかな

宗内昭春

たのしみはリーチかけたるマージャンのワンチャンスパイ手にふれしとき

三谷初子

たのしみは夕餉の膳にくつろいでとりとめなきこと語り合うとき

森善男

たのしみは机に向い書く文字の思いかけずもよく出来し時

弓家田芳子

たのしみは待つ子の顔を思いつつみやげたずさえ家路さす時

編集後記

○約十人の委員が、毎日下校時間ギリギリまで残つて一ケ月掛りで、つくりあげたのが、此の〃る・くーる〃第6号です。昨年は三ケ月掛つた仕事を一ケ月足らずで仕上げてしまつたので、何分にも不行届の点はある事と思いますが、松高生の思想や感情を、松高生の手で編集した雑誌です。どうか、温い気持で読んで下さい。

○〃る・くーる〃等というわけの分らない名称は廃止して、もつと、分り易く、親しみやすい名前にしようじあないか、という声が起り、編集委員会や、自治委員会で大いに問題にされたが、結局〃る・くーる〃という名称を存続させる事にした。

※尚、〃る・くーる〃の語義は藤本先生にお願いして4ページに掲載しておいた。

○最初、応募原稿が皆無に近い状態で委員一同を大いに心配させたが、日を経るにつれ、続々と集まり、最後には必要量の三倍もの原稿の波が押し寄せ、委員に嬉しい悲鳴をあげさせるに至つた。折角いただいた原稿を紙面の関係で一部しか載せられなかつた事を深くお詫び致します。

（記念誌発行委員）

〃る・くーる〃　第六号

昭和三十三年三月十二日　印刷
昭和三十三年三月十五日　発行

発行所　東京都世田谷区上北沢町一丁目
都立松原高等学校生徒会

発行責任者　大和久　鈴江

印刷所　世田谷区松原町四ノ三二四
有限会社　山下印刷
TEL (32) 七九一四